

上峰町文化財調査報告書第15集

坊所二本松遺跡

共同住宅建設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1998年3月

上峰町教育委員会

上峰町文化財調査報告書第15集

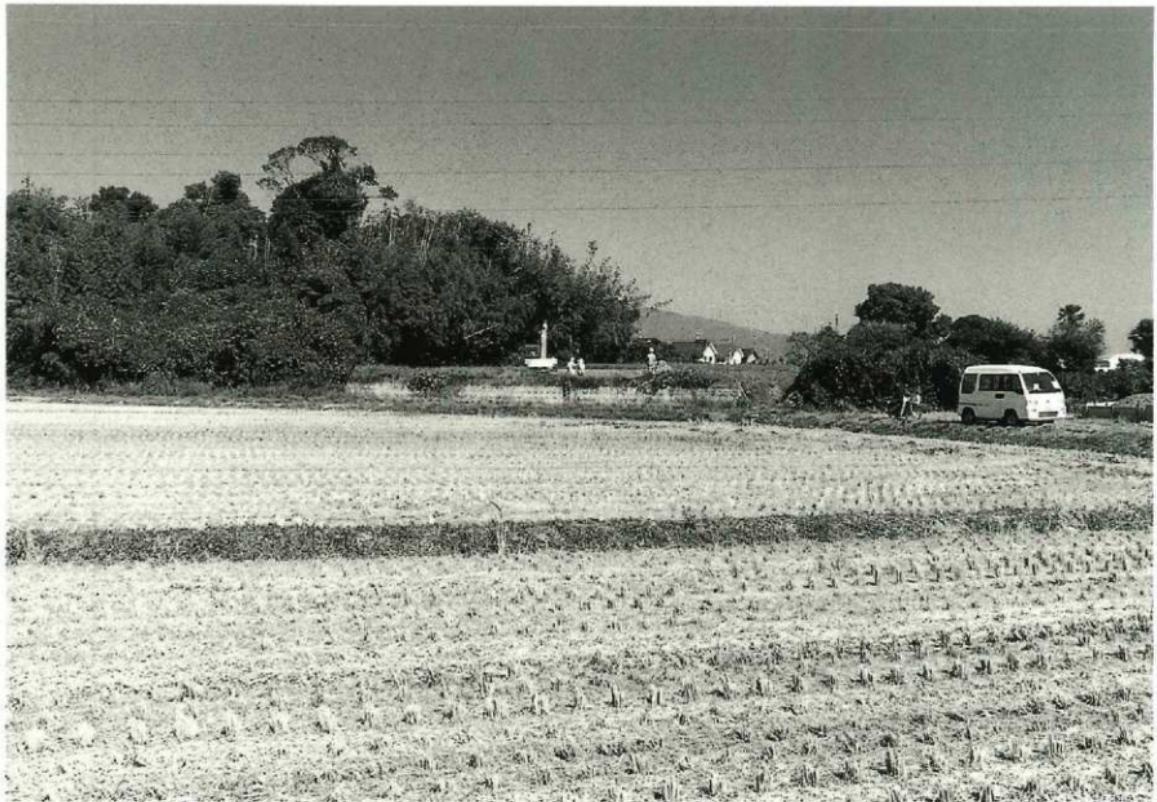
ぼうじょにほんまつ
坊所二本松遺跡

共同住宅建設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書



1998年3月

上峰町教育委員会



遺跡遠景（平成 8 年、確認調査時）—南沖積地より一



調査区域全景（遺構検出状況）—北東より—

序

從来より、上峰町は遺跡の宝庫と言われてきました。北部の脊振山系、その南麓から派生し南北に延びる洪積世丘陵と開析谷、さらに有明海へと続く沖積平野と変化にとんだ地形を含む町域には、いたるところに先人たちの暮らしの足跡が刻み込まれています。

教育委員会では、こうした人々の暮らしの足跡、歴史的資産を保存・活用し、将来へ継承していくために、開発と文化財の保護との調整を図ってまいりました。

町の中央を国道34号線が横断し、ここから福岡県久留米市へは県道が通るという恵まれた交通環境に位置している上峰町は、佐賀市や鳥栖市、久留米市へも10km前後の最適な通勤圏にあるところから、近年人口も着実に伸び、年々宅地開発計画が増加の傾向にあります。とくに町の中央部に位置し、公的施設が集中する坊所地区は、数年前の大型店舗の進出以来、この傾向が一層顕著であり、昔ながらの農村風景は変貌しつつあります。

この報告書は、このような坊所地区における共同住宅の建設工事に先立ち、上峰町教委員会が実施した坊所二本松遺跡の埋蔵文化財発掘調査事業の報告書であります。今回の発掘調査では、弥生時代の壇場墓をはじめ祭祀土壙などが検出され、比較的調査例が少ないこの地域にあって、当時の人々の暮らしを考える上で貴重な資料を得ることができました。この報告書を学術資料として、また住民の共有の財産としての文化財を大切に保存していくための資料として役立てていただければ幸いです。

なお、今回の調査にあたって、ご協力、ご指導をいただいた地権者福島ヨシ子様はじめ、佐賀県教育委員会文化財課、関係各位に対し深く感謝申し上げます。

平成10年3月

上峰町教育委員会

教育長 古賀一守

例　　言

1. 本書は、共同住宅建設に先立ち、開発事業主福島ヨシ子氏の委託を受け、上峰町教育委員会が発掘調査を実施した、佐賀県三養基郡上峰町大字坊所字二本松 337-1に所在する坊所二本松遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、開発予定地上峰町大字坊所字二本松337-1他3筆、1,348m²のうち、事前の確認調査で甕棺墓が集中して検出された337-1 (687m²) の600m²について、上峰町教育委員会が主体となり実施したものである。
3. 調査区の名称は、今後の調査を考慮し、坊所二本松遺跡1区とした。
4. 現地での発掘調査は平成9年6月9日から平成9年9月13日まで行った。
5. 現場での遺構実測作業は、有限会社埋蔵文化財サポートシステムに委託した。
6. 遺構及び出土遺物の写真撮影は、原田大介が行った。
7. 調査後の出土遺物・記録類の整理作業は、上峰町船石文化財整理事務所にて実施した。
8. 本文中の挿図の実測図作成、トレース作業等は、調査員の指導で製図作業員があつた。
9. 本書の執筆、編集は原田が行った。
10. 今回の調査で出土した全ての遺物、図面・写真・記録類は、上峰町教育委員会で保管している。

凡　　例

1. 坊所二本松遺跡の略号は「BNM」であり、今回の調査区略号は「BNM-1」とした。
2. 遺構番号は発掘調査当時のまとし、101より151まで使用した。また、遺構番号に冠した2文字のアルファベットは、遺構の種別を表す。
S J……甕棺墓　　S K……土壤・貯藏穴　　S D……溝跡・溝状遺構　　S E……井戸跡
3. 挿図中の方位は、既成の地形図を用いたものは特記のないかぎり図上方が座標北、現場で作成した遺構図等は図中方位が座標北を表している。
4. 表中の数値に付した記号で、() は推定値を、※は部分値をそれぞれ表す。
5. 遺構実測図中の点線は推定線を、一点鎖線は調査区境界をそれぞれ表す。

調査組織

調査事務局	総括	古賀 一守	上峰町教育委員会	教育長
	事務主任	江頭 典雄	〃	教育課長
	経費執行	原田 大介	〃	文化係長
	〃	鶴田 浩二	〃	文化係
調査組織	調査員	原田 大介	上峰町教育委員会	文化係長
	〃	鶴田 浩二	〃	文化係
調査指導			佐賀県教育委員会文化財課	

発掘作業参加者

赤木淳子、秋山キミ、石丸富雄、江頭晴次、江口照代、江越 香、大石貞義、緒方ツタエ、北島光雄、後藤セツ子、執行一水、志波正千、高尾マツヨ、高島篤枝、高島 昇、高島ハツネ、武広ハル子、鶴田末友、鶴田竹次、原横文代、原横泰雄、福島一雄、福島ツタエ、松尾キミエ、吉田英子、吉原勝栄

整理作業参加者

大隅弓子、島美保子、坂本恵子、田尻祐子、矢動丸洋子（以上、製図作業員）

目 次

序

例言・凡例

調査組織・発掘作業参加者・整理作業参加者

I. 遺跡の位置と環境	1
1. 遺跡の位置	1
2. 歴史的環境	1
II. 調査の経過	6
1. 調査に至る経緯	6
2. 調査経過	6
III. 遺跡の概要	8
1. 遺跡の概要	8
2. 調査区の概要	8
IV. 遺構	11
1. 墓 棚 墓	11
2. 井戸跡・土壙	43
3. 溝 跡	46
V. 遺物	47
1. 墓 棚	47
2. その他の土器・石器	54
VI. まとめ	61

挿図目次

Fig. 1	坊所二本松遺跡の位置及び周辺遺跡 (1/50,000)	2
2	坊所二本松遺跡周辺地形図および調査区位置図 (1/5,000)	9
3	坊所二本松遺跡 1 区遺構配置図 (1/200)	10
4	甕棺墓実測図(1) SJ-101 (1/20)	13
5	甕棺墓実測図(2) SJ-102 (1/20)	14
6	甕棺墓実測図(3) SJ-103 (1/20)	15
7	甕棺墓実測図(4) SJ-104 (1/20)	16
8	甕棺墓実測図(5) SJ-105・SJ-106 (1/20)	17
9	甕棺墓実測図(6) SJ-107 (1/20)	18
10	甕棺墓実測図(7) SJ-108 (1/20)	19
11	甕棺墓実測図(8) SJ-109 (1/20)	20
12	甕棺墓実測図(9) SJ-110 (1/20)	21
13	甕棺墓実測図(10) SJ-111 (1/20)	22
14	甕棺墓実測図(11) SJ-112 (1/20)	23
15	甕棺墓実測図(12) SJ-113 (1/20)	24
16	甕棺墓実測図(13) SJ-114 (1/20)	25
17	甕棺墓実測図(14) SJ-115・SJ-116 (1/20)	26
18	甕棺墓実測図(15) SJ-117 (1/20)	27
19	甕棺墓実測図(16) SJ-118 (1/20)	28
20	甕棺墓実測図(17) SJ-119 (1/20)	29
21	甕棺墓実測図(18) SJ-120 (1/20)	30
22	甕棺墓実測図(19) SJ-121 (1/20)	31
23	甕棺墓実測図(20) SJ-122 (1/20)	32
24	甕棺墓実測図(21) SJ-123 (1/20)	33
25	甕棺墓実測図(22) SJ-124 (1/20)	35
26	甕棺墓実測図(23) SJ-125 (1/20)	36
27	甕棺墓実測図(24) SJ-126 (1/20)	37
28	甕棺墓実測図(25) SJ-127 (1/20)	38
29	甕棺墓実測図(26) SJ-128・SJ-129 (1/20)	39
30	甕棺墓実測図(27) SJ-130 (1/20)	40
31	甕棺墓実測図(28) SJ-131・SJ-132 (1/20)	41
32	甕棺墓実測図(29) SJ-133・SJ-134・SJ-136 (1/20)	42
33	井戸跡・土壤実測図 SE-151・SK-137～SK-147 (1/60)	45
34	溝跡実測図 SD-148 (1/200)	46
35	甕棺口縁実測図(1) SJ-101～SJ-108 (1/4)	50

36	妻棺口縁実測図(2)	SJ-109~SJ-114・SJ-116・SJ-117 (1/4)	51
37	妻棺口縁実測図(3)	SJ-118・SJ-119・SJ-121・SJ-123~SJ-127 (1/4)	52
38	妻棺口縁実測図(4)	SJ-129~SJ-131・SJ-134・SJ-136 (1/4)	53
39	出土土器実測図(1)	SK-135・SK-137~SK-139 (1/4)	57
40	出土土器実測図(2)	SK-137~SK-140・SK-143・SK-144 (1/4)	58
41	出土土器実測図(3)	SK-144・SK-145・SK-148・SK-149・SE-151 (1/4)	59
42	出土土器実測図(4)	SE-151・SJ-104・SJ-107・SJ-124・SJ-127 (1/4)	60

表 目 次

Tab. 1	出土妻棺墓一覧表.....	12
2	出土土壤一覧表.....	44
3	出土妻棺一覧表.....	49
	報告書抄録.....	卷末

図 版 目 次

巻頭図版

- P L. 1 遺跡遠景（平成8年、確認調査時）
 2 調査区域全景（遺構検出状況）

巻末図版

- 3 遺構(1) SJ-101~SJ-112
 4 遺構(2) SJ-113~SJ-127・SK-141・SK-145・SK-146
 5 遺構(3) SJ-128~SJ-133・SJ-136・SE-151
 6 遺構(4) SK-137~SK-140・SK-142・SK-143・SK-147・SD-148
 7 遺物(1) SK-135・SK-137~SK-139
 8 遺物(2) SK-137~SK-139・SK-140・SK-143~SK-145・SD-148
 9 遺物(3) SD-149・SE-151・SJ-104・SJ-107
 10 遺物(4) SJ-124・SJ-127・石器など

I. 遺跡の位置と環境

1. 遺跡の位置 (Fig. 1)

坊所二本松遺跡は、佐賀県三養基郡上峰町大字坊所字二本松の洪積世低位段丘上（標高6 m～8 m）に位置している。

坊所二本松遺跡が所在する佐賀県三養基郡上峰町は、佐賀県東部の穀倉地帯である佐賀平野のほぼ中央、三養基郡の西端に位置しており、東部は同郡中原町・北茂安町、南部は三根町、西部は神埼郡東脊振村・三田川町と境を接している。

鳥栖市から佐賀郡大和町に至る佐賀県東部には、北部の脊振山地、その南麓に発達する洪積世丘陵、さらに南部の有明海へと続く沖積平野が展開し変化にとんだ地形が発達している。なかでも山麓から沖積平野へと移行する部分に発達する洪積世丘陵は、山麓部に源を発し有明海へと南流する大小の河川によって開析され数多くの南北に延びる舌状を呈した段丘となっている。

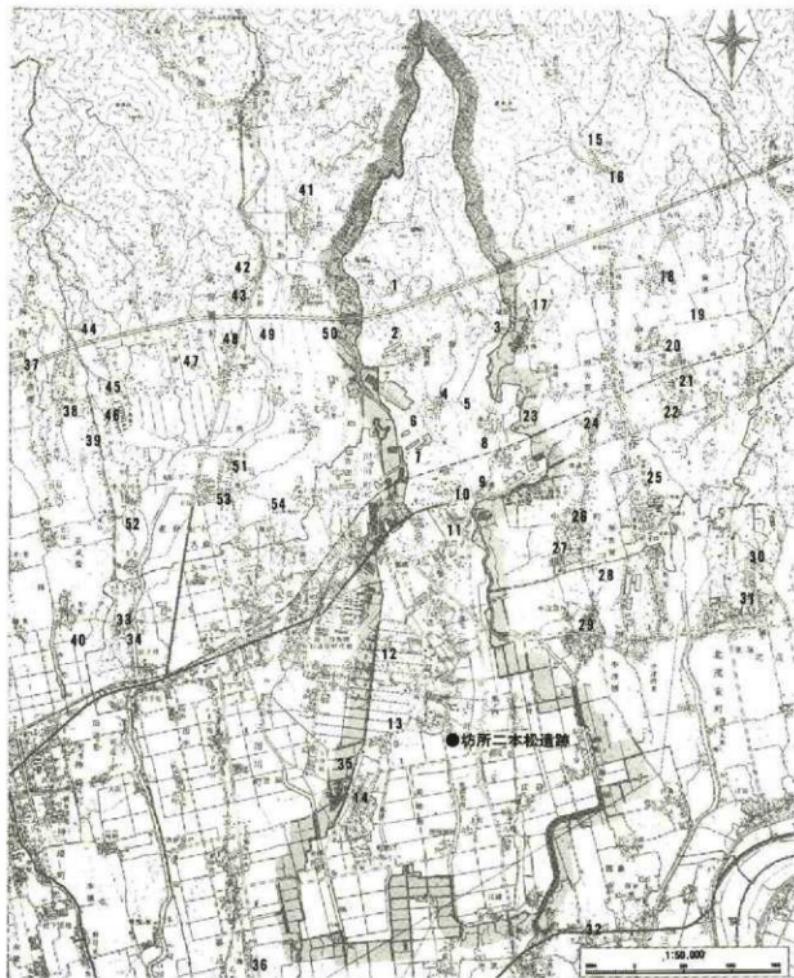
坊所二本松遺跡が立地する丘陵は、上峰町中南部の上坊所、下坊所両集落が占有する坊所丘陵南端から更に南東に延びる一支丘で、標高約5 mの沖積地に半島状に突き出た丘陵である。丘陵東側の沖積地は切通川の氾濫原で、これに対して、丘陵南側の沖積地は古筑後川の最大蛇行線と考えられ、沖積面との間には比高2 m程の段丘崖が発達している。

2. 歴史的環境 (Fig. 1)

上峰町を中心に佐賀県東部の遺跡を概観すると、前述の洪積世段丘が古くから人々の生活の舞台となっており、各段丘上には遺跡の分布が知られ、県内でもとくに弥生時代遺跡を中心に遺跡の密度が高い地域となっている。沖積地を望む丘陵のほとんどが集落あるいは墓域として占有され、繩文時代遺跡と比較すると、量的にも質的にも爆発的に増加、充実する。銅鐸の鋳型を出土した鳥栖市安永田遺跡¹⁾、約400基の壺棺墓が検出された中原町姫方遺跡²⁾、12本の銅矛を埋納した北茂安町検見谷遺跡³⁾、壺棺墓から舶載鏡を出土した東脊振村三津永田遺跡⁴⁾、近年の工業団地建設に先立つ調査で貴重な遺構・遺物が検出された三田川・神埼・東脊振の2町1村にまたがる吉野ヶ里遺跡⁵⁾など多くの著名な集落遺跡、墳墓群が知られ、弥生の「クニ」あるいは「ムラ」単位の集団の存在が想定されるに至っている。南北約12 km、東西約3 kmと南北に細長い町域をもつ本町においても同様で、町の北部から中央部を占める洪積世段丘を中心に弥生時代の遺跡が分布している。

先土器時代の遺跡は、各段丘ごとに層序が異なる本地域においては本格的な調査がなされていないのが現状で、断片的な遺物の出土にとどまっている。町内では、平成4年度の県営農業基盤整備事業に伴う八藤遺跡の調査において細石刃1点が発掘調査において検出されているのみで⁶⁾、付近では、三田川町との境界に位置する二塚山丘陵の三田川町側からナイフ形石器の採取が報告されている⁷⁾。平成5年度の八藤遺跡下層における阿蘇4火碎流と埋没林に係る調査では、先土器時代の年代示標となっている始良一-Tn火山灰(AT)の含有ピークが、通常の丘陵上の埋蔵文化財調査で遺構検出面としている「地山」の表層を構成する黄褐色風積土層の最上部で検出されている⁸⁾。

繩文時代になると中原町香田遺跡⁹⁾や東脊振村戦場ヶ谷遺跡¹⁰⁾などが出現する。町内においてもこれまで町北部の丘陵部から土器や石器が採取されていたが、農業基盤整備事業に伴う調査の結果、平成元年度の船石遺跡¹¹⁾区¹²⁾はじめ八藤遺跡¹³⁾などで遺物・遺構がまとまって検出されており、今後の調査例の増加が期待されている。



1 上締町	11 一本谷遺跡	21 駿方前方後圓墳	31 東尾洞廻出土遺跡	39 志波比開拓社地古墳群	49 西石動遺跡
2 領西山古墳群	12 目連原古墳群	22 駿方原遺跡	32 三相町	50 下石動遺跡	50 下石動遺跡
3 屋形原古墳群	13 塚の屋高寺跡	23 上地遺跡	33 本文貝塚	51 朝原遺跡	51 朝原遺跡
4 谷渡古墳群	14 上米多貝冢	24 ドンドウ高遺跡	34 三田川町	52 爭上高寺跡	52 爭上高寺跡
5 堀土丘跡	中原町	25 町南遺跡	35 吉野ヶ里丘丘陵遺跡	53 大塚遺跡	53 大塚遺跡
6 八幡遺跡	15 山田城跡出土土地	26 天神遺跡	36 下中村遺跡	54 横田遺跡	54 横田遺跡
7 五本谷遺跡	16 山田古墳群	27 西麻永遺跡	37 戰場ヶ谷遺跡		
8 二塚山遺跡	17 大塚古墳	28 宝満谷遺跡	38 下藤貝塚		
9 紙石南遺跡	18 八幡社遺跡	29 宝満宮前方後円墳	39 三津永田遺跡		
10 互通遺跡	20 駿方遺跡	30 大塚古墳	40 下三津前方後円墳		
		31 志波比大本松遺跡	41 夕ヶ里遺跡		
		32 伊勢屋等前方後円墳	42 西一本杉遺跡		

Fig. 1 坊所二本松遺跡の位置及び周辺遺跡 (1/50,000)

弥生時代になると、遺跡の数、規模、内容が飛躍的に増加、充実することは先に触れたが、早くから魏志倭人伝の「弥奴國」の所在地を佐賀平野東部、なかでも三養基郡西部の旧三根郡にあてる論考が行われてきたことは周知のことである。旧三根郡に属する上峰町においても、丘陵部のほとんどにこの時期の遺跡が展開している。しかし、町南地部の米多地区、坊所地区の丘陵部は、中近世以降集落として発達し早くから宅地化が進み、本格的な調査例に乏しかったが、近年、再開発に伴いようやく部分的な調査¹⁷⁾が行われるようになった。これに対し、町北部の堤地区周辺は、近年の大型開発に伴い広範囲の遺跡が調査の対象となっており、当時の社会の様子を知るうえで貴重な資料が得られている。町内の代表的遺跡としては、甕棺墓から細形銅劍と貝釧を出土した切通遺跡¹⁸⁾、神崎郡東脊振村・三田川町にまたがる佐賀県東部中核工業団地の建設に伴い甕棺墓、土壙墓約300基が調査され馬銅鏡、彷彿鏡をはじめとする貴重な副葬品を出土した二塚山遺跡¹⁹⁾、五本谷遺跡²⁰⁾、佐賀県住宅供給公社の宅地造成に伴う調査で一集団の集落部分の全容が明らかになった一本谷遺跡²¹⁾、地区運動公園整備に伴う調査で5世紀代の古墳とともに支石墓はじめ多数の甕棺墓が検出された船石遺跡²²⁾などが知られている。またこの度の県営農業基盤整備事業に伴う調査においても船石南遺跡²³⁾、船石遺跡²⁴⁾から住居址や甕棺墓などが検出されている。

古墳時代になると、この地域にも首長墓が出現する。初頭の時期には中原町姫方原遺跡²⁵⁾・五本谷遺跡などで方形周溝墓が営まれ、やがて中期にかけて島栖市から大和町にかけての山麓部や丘陵部に前方後円墳が出現する。島栖市劍塚古墳²⁶⁾、中原町姫方古墳²⁷⁾、上峰町から三田川町にまたがる目連原古墳群²⁸⁾、神崎町伊勢塚古墳²⁹⁾、佐賀市銚子塚古墳³⁰⁾、大和町船塚古墳など佐賀県東部の代表的古墳が築かれる。後期になると、現在長崎自動車道や、県道島栖一川久保線が通る山麓部から丘陵部にまたがる一带に小円墳を中心とした古墳が多数築かれ、それそれが古墳群を形成している。

後の『肥前風土記』に見える三根郡米多郷に属す当時の上峰町一帯は、「古事記」の記事によれば、応神天皇の曾孫にあたる「都紀女加」なる人物が初代の米多国造として中央より下向した地域に比定され、その中心は、町南部の米多地区から三田川町の目連原一帯にあったと想定されている。町内の主要な古墳としては、米多国造一族の墳墓として、5世紀代後半に形成されたとを考えられる前方後円墳7基ほか円墳數基からなる目連原古墳群³¹⁾、同じく5世紀代の古墳で蛇行状鉄劍、鉄矛を出土した船石天神宮境内の船石古墳1～3号墳³²⁾が知られている。また、後期の群集墳としては、町北部の鎮西山の周辺山麓部を中心に古墳群が存在している。一方、この時期の集落は、三田川町下中杖遺跡³³⁾、東脊振村下石動遺跡³⁴⁾などが知られているが、弥生時代集落の調査例に比べると少なく、いまだに実態が明らかになっていないのが現状である。町内の遺跡をみても、当時の政治的中心であったと考えられる町南部の米多地区周辺における本格的調査例がなく、今後の大きな課題といえる。

奈良・平安時代遺跡としては、三田川町下中杖遺跡、東脊振村辛上鹿寺跡³⁵⁾、靈仙寺跡³⁶⁾などが著名であるが、まとまった調査例が少なく実態はあまり解明されていない。当時の遺構として大規模なものは、佐賀平野にしかれた条里制の遺構が上げられ、早くから地名などから条里の復元が試みられ、現在ではほとんどの条里が復元されている。また大宰府から肥前国府へ通じる官道の調査も進み、近年部分的な発掘調査が行われている。

町内では堤土塁跡³⁷⁾や塔の塚山寺跡³⁸⁾などが奈良時代の遺跡として載前から注目されている。町北部の堤地区の八藤丘陵と二塚山丘陵の間を遮断する形で築かれた堤土塁跡は、版築工法をにより築かれた福岡県の水城に似た施設＝「小水城」で、その築造目的が、大宰府の防衛施設であるとする説、灌漑用水確保のための堤防であるとする説など議論がなされてきたが、平成2年の土墨の東方に接する八藤丘陵の調査において、土塁から一直線に八藤丘陵を横断する側溝状の遺構が検出され³⁹⁾、その性格付けにあらたに古代道の存在が想定されるに至って

いる。また町南西部を占める目達原丘陵の南端部に位置する塔の塚廃寺跡は、百濟系單弁軒丸瓦が発見され、戦前までは基壇、礎石の存在が知られていた奈良時代中期の寺院址で、目達原古墳群を営んだ米多国造一族の流れをくむ三根郡の郡司層が建立したものと推定されている。また町内における奈良、平安時代の集落は、農業基盤整備事業に伴う調査などで、八幡遺跡³⁶、坊所一本谷遺跡³⁷などでまとまった調査がなされたのみで、今後の調査例の増加が期待される。

中世になると、北部の山麓部の小峰に山城が築かれ、沖積平野部には環濠を伴う平城や集落が出現する。町内の中世城館址としては、北部の鎮西山山城、上峰町中央部の平野を臨む丘陵部に坊所城跡、平野部には米多城跡、前半田城跡、江迎城跡、一の橋環濠集落、加茂環濠集落などが知られており、江迎城跡では13世紀後半代の龍泉窯系の青磁碗が、坊所城跡³⁸では16世紀後半代の青花がそれぞれ出土している。

以上、上峰町を中心に佐賀県東部の遺跡を概観したが、まさにこの地域は遺跡の密度、その内容ともに高く、遺跡の宝庫と部にふさわしい地域といえる。

註

- 1) 藤漸徳・石橋新次『柏比遺跡群範囲確認調査第3年次概要報告書』鳥栖市文化財調査報告書第30集 佐賀市教育委員会 1980
- 2) 木下巧・天本洋一『姫方遺跡』佐賀県文化財調査報告書第30集 佐賀県教育委員会 1974
- 3) 七田忠昭『奥見谷遺跡』北茂安町文化財調査報告書第2集 北茂安町教育委員会 1986
- 4) 金闇丈夫・坪井清足・金闇恕『佐賀県三津永田遺跡』『日本農耕文化の生成』日本考古学協会 1961
- 5) 桑原幸則『環濠集落 吉野ヶ里遺跡 概報』佐賀県教育委員会 1990
- 6) 平成4年度、上峰町教育委員会調査、整理中
- 7) 七田忠志『原始』『上峰村史』上峰村 1979
- 8) 下山正一・西田民雄『II. 佐賀県上峰町周辺の地形と地質』『佐賀平野の阿蘇4火砕流と埋没林』上峰町文化財調査報告書第11集 上峰町教育委員会 1994
- 9) 高瀬哲郎・堤安信・久保伸洋『香田遺跡』『香田遺跡』九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書2 佐賀県文化財調査報告書第57集 佐賀県教育委員会 1981
- 10) 七田忠志『佐賀県戦場ヶ谷遺跡』『史前学雑誌』6-2・4 1934
- 11) 原田大介『船石遺跡V』上峰町文化財調査報告書第12集 上峰町教育委員会 1995
- 12) 原田大介『八幡遺跡II・堤土塁跡II』上峰町文化財調査報告書第14集 上峰町教育委員会 1998
- 13) 聰寺遺跡1区(平成4年、上峰町ふるさと学館建設に伴う調査)、同2区(平成8年度、共同住宅建設に伴う調査)など、上峰町教育委員会調査、整理中
- 14) 金闇丈夫・金闇恕・原口正三『佐賀県切通遺跡』『日本農耕文化の生成』日本考古学協会 1961
- 15) 高島忠平・七田忠昭『二塚山遺跡』『二塚山』佐賀県文化財調査報告書第46集 佐賀県教育委員会 1979
- 16) 木下巧・七田忠昭『五本谷遺跡』『二塚山』佐賀県文化財調査報告書第46集 佐賀県教育委員会 1979
- 17) 七田忠昭『一本谷遺跡』上峰村文化財調査報告書 上峰村教育委員会 1983
- 18) 七田忠昭『船石遺跡』上峰村文化財調査報告書 上峰村教育委員会 1983
- 19) 昭和60、62年度、上峰村教育委員会調査、整理中
- 20) 鶴田浩二・原田大介『船石遺跡II 図録編』上峰村文化財調査報告書第6集 上峰村教育委員会 1988
鶴田浩二・原田大介『船石遺跡II 本文編』上峰村文化財調査報告書第7集 上峰村教育委員会 1989
- 21) 木下巧他『姫方原遺跡』佐賀県文化財調査報告書第33集 佐賀県教育委員会 1976
- 22) 石橋新次『剣塚前方後円墳』鳥栖市文化財調査報告書第22集 鳥栖市教育委員会 1984
- 23) 前出(3)
- 24) 松尾慎作『目達原古墳群調査報告 佐賀県史蹟名勝天然記念物調査報告』第9輯 佐賀県教育委員会 1950
- 25) 木下之治『古代國家の形成』『佐賀県史』佐賀県 1968
- 26) 木下之治編『鏡子塚』佐賀市教育委員会 1976

- 27) 前出 (24)
- 28) 前出 (18)
- 29) 七田忠昭・高山久美子・西田和己 「下中枕遺跡」 佐賀県文化財調査報告書第54集 佐賀県教育委員会 1980
- 30) 高瀬哲郎他 「下石動遺跡」「下石動遺跡」 九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書 6 佐賀県文化財調査報告書第86集 佐賀県教育委員会 1987
- 31) 松尾禎作 「東脊振村辛上磨寺跡の調査」「佐賀県史蹟名勝天然記念物調査報告」 第5輯 佐賀県 1936
- 32) 田平徳栄他 「藍仙寺跡」 東脊振村文化財調査報告書第4集 東脊振村教育委員会 1980
- 33) 高島忠平・杠一義 「堤土塁跡」 上峰村文化財調査報告書 上峰村教育委員会 1978
- 34) 松尾禎作 「塔の塚庵寺址」「佐賀県史蹟名勝天然記念物調査報告」 第7輯 佐賀県 1940
- 35) 原田大介 「八幡遺跡II・堤土塁跡II」 上峰町文化財調査報告書第14集 上峰町教育委員会 1998
平成3、4年度、上峰町教育委員会調査、整理中
- 36) 平成3、4年度、上峰町教育委員会調査、整理中
- 37) 平成5、6年度、上峰町教育委員会調査、整理中
- 38) 原田大介 「坊所城跡」 上峰町文化財調査報告書第10集 上峰町教育委員会 1992

II. 調査の経過

1. 調査に至る経緯

平成 8 年 9 月 20 日、上峰町大字坊所字二本松における共同住宅建設に係る「埋蔵文化財の有無およびその取扱について」の照会文書が、佐賀市在籍者個人名で、提出された。

町教育委員会では、照会があった開発が、周知の埋蔵文化財包蔵地内の開発であることから、事業主に対して、文化財保護法第57条の 2 第 1 項の規定による埋蔵文化財発掘の届出が必要である旨回答するとともに、事前の確認調査の実施にむけて関係者と協議を行った。

確認調査は、開発予定地である大字坊所字二本松 336-1、同-2、同-3、337-1 の 4 筆、合計 1,346m²を対象に、平成 8 年 10 月 11 日に実施した。

開発予定地の現況は、南北上下 2 段の畳（上段が 337-1 [687m²]、下段が 336-1 他 2 筆 [661m²]）で、その間には、高さ約 1.2m のコンクリートブロックの擁壁が積まれている。確認調査の結果、上段の畳からは甕棺墓、あるいは墓壙と考えられるもの 10 基ほどが検出された。また、下段の畳からは溝跡、土壙、ピットなどが検出された。

確認調査の結果を受けて、上峰町教育委員会は、県文化財課と今後の遺跡の取扱について協議を行い、開発予定地全域について本調査の必要があるとの判断に立ち、開発側へこの旨を通知し調整を図った。これに対し、開発側からは、費用負担が困難であるとの理由から、国あるいは県の補助事業による調査費補助の申し入れがなされたが、上峰町教育委員会規定（平成 8 年 6 月 25 日、「開発行為に伴う町内遺跡埋蔵文化財発掘調査の費用負担に関する規定」）の条件に該当しないことから、この調査についての公費による補助制度適用の検討対象とされなかった。そして、平成 8 年 12 月 26 日付けで、開発事業主より開発の取下書が提出された。

しかし、同日、地権者より改めて、本人名義による共同住宅建設の届け出があり、公費による本調査実施について併せて依頼が行われた。このことを受け、町では再度発掘調査に係る費用の公費補助を検討したが、開発事業主の変更など前後の事情を考慮し、適用できないとの判断が下された。その後も開発側との調整は続き、最終的には、確認調査で甕棺墓が確認された上段の畳部分 687m²（開発予定面積の 50%）について、開発予定面積 1,346 m²で積算した調査費の 50% で、平成 9 年度の受託事業として本調査を実施することとなり、下段の畳については駐車場とし地下の遺構に工事の影響を与えないことを条件として現状のまま保存することとなった。

2. 調査の経過

今回の坊所二本松遺跡の発掘調査は、確認調査以後、事業主体者の交替、調査面積の縮小など調整段階で曲折を経たが、平成 9 年 5 月より諸準備を進め、5 月 16 日、事業主と上峰町との間で埋蔵文化財発掘調査に係る委託契約を締結した。その後、6 月 9 日より甕棺墓 20 基程度を予想し、約 2 カ月の調査期間を予定し発掘作業を開始した。

現地での発掘調査は、平成 9 年 6 月 9 日に着手し、予定を 1 カ月余り超過した 9 月 13 日まで作業を実施した。以下、簡略に調査経過を記す。

6 月 9 日 調査対象地区に隣地境界線より 2 m セットバックし、600m²の調査区を設定。調査区北部より重機による表土剥ぎ作業を開始する。表土剥ぎ作業は、翌 10 日に終了。予想を上回る数の甕棺墓あるいは墓壙と思われる遺構が検出された。

- 11日 現場で簡単な作業の安全祈願を行い、その後、発掘器材の搬入、テント設営等の調査の準備作業を行う。
- 12日 本日より作業員による作業を開始する。調査区北部から遺構検出作業に着手する。その後、調査前の遺構検出状況写真撮影を行い、検出された遺構のうち単独土壙、ピット、溝跡などの遺構より掘り下げを始める。また、座標を基準としたグリッドを設定、測量杭打ち作業を併せて行った。この遺構検出作業で甕棺墓あるいは墓壙と考えられる遺構が30基程が検出された。
- 16日 甕棺墓あるいは墓壙と考えられる遺構の掘り下げに着手。
- 19日 これまでに掘りあげた遺構の写真撮影を行う。
- 20日 未明に台風6号最接近。日中は天候回復、甕棺墓の掘り下げ作業を進める。
- 30日 甕棺他遺構実測業務委託契約締結。
- 7月3日 掘りあげが終了した甕棺墓から実測作業に着手（業務委託）。
- 7月後半～8月上旬 雨天などで作業中止の日が多く調査進捗せず。
- 8月11日～15日 お盆休み。
- 18日～作業再開。夏草が茂り、調査区内の草刈りを実施。天候もやや持ち直し、以後、甕棺墓実測作業と掘り下げ作業を並行して行う。この時点で約30基の甕棺墓が確認されていたが、調査が進んで調査区境界付近などから新たな甕棺墓が出土し、9月5日に調査区南端のブロック擁壁際から小児棺が検出されたのが最後であった。
- 9月8日 甕棺墓実測作業終了。現場清掃。9日土壤など個別の遺構写真撮影。甕棺墓以外の遺構の実測開始。発掘器材類を撤収。
- 10日 甕棺墓以外の遺構の実測終了。測量基準杭、甕棺墓実測ポイント等の撤去を行う。
- 11日～重機による調査区の埋め戻し作業を開始した。13日に埋め戻し作業を終了し、現場でのすべての作業を終了し、翌週16日付けで現場の引き渡しをおこなった。この後、出土遺物・記録類を船石文化財整理事務所に移し、整理作業を引き続いた。
- 調査には、6月上旬から約3カ月の期間を要したが、その間に、検出された遺構は、弥生時代中期の甕棺墓35基、土壙11基、中世の溝跡1条、井戸跡1基であった。

III. 遺跡の概要

1. 遺跡の概要 (Fig. 2)

坊所二本松遺跡は、佐賀県三養基郡上峰町大字坊所字二本松の標高 5 m～8 m の洪積世低位段丘上に位置している。町の中南部に位置し、現在上坊所、下坊所の集落が占有する坊所丘陵は、丘陵の中央部に坊所城跡が位置しているがこの付近を谷頭とし、上峰小学校グランド南側で切通川の氾濫原に流れ込む小谷によって、上坊所集落や小学校が立地し、櫻寺遺跡がひろがる丘陵（「上坊所丘陵」と呼称する。）と下坊所本集落が立地し、杉寺遺跡や坊所三本松遺跡がひろがる丘陵（「下坊所丘陵」と呼称する。）に分かたれている。坊所二本松遺跡は、この下坊所丘陵が、さらに南東に半島状に延びた部分に位置している。

遺跡が位置する、下坊所地区をはじめ坊所地区一帯は、中世以来、集落として発達し早くから宅地化が進んできたために、これまで本格的な発掘調査の例がなかったが、今回の発掘調査も含めて、近年再開発に伴う発掘調査が部分的に行われるようになった。分譲宅地造成に伴う坊所城跡¹⁾、上峰町ふるさと学館や共同住宅建設に伴う櫻寺遺跡²⁾ほか、開発行為に先立つ埋蔵文化財確認調査などで、弥生時代から中世に及ぶ遺構が現在も地下にかなりの密度で遺存していることが明らかになりつつある。

一方、坊所二本松遺跡が位置する丘陵では、現在も畠部分には耕作に伴い掘り起こされた壠塀の破片が散布している。また丘陵先端部においても、下坊所地区機械利用組合の農業機器格納庫建設の折りに、多数の壠塀が発見されたと伝えられている。

2. 調査区の概要 (Fig. 2)

今回の調査の対象となった坊所二本松遺跡 1 区は、遺跡が占有する半島状の丘陵のほぼ中央部南斜面（標高 8 m付近）に位置している。南東に延びる丘陵は、今回の調査区から東へ 150m 程の所で沖積地に没し、南は今回建設される共同住宅の駐車場として現状保存することになった畠一枚を隔てて、標高約 4 m の沖積面が広がり、水田として利用されている。

調査区東側には小さな谷が南に向かって開いており、調査区域も南東に向かって緩やかに傾斜している。また、調査区域の土層は、後世の耕作などによる削平を受け、各時代の遺物包含層は失われ、層厚約20cmの畠の耕作土層直下が洪積世低位段丘構成層（大曲層³⁾）で、いわゆる地山であり、この面が遺構検出面となっている。現在調査区域一帯は、ほぼ 8 m の標高を計るが、出土した壠塀を見て、完全な形で遺存しているものではなく、ほとんどが壠の上部を耕作により失っており、本来の丘陵は現況より 1 m 程は高かったものと思われる。

調査区域は、東西約20m、南北約30mの矩形の区域で、ここに座標を基準として、南北列北から 1～4 の 4 列、東西列東から A～D の 4 列の 10m × 10m グリッドを設定し調査を行った。

註

1) 原田大介『坊所城跡』上峰町文化財調査報告書第10集 上峰町教育委員会 1992

2) それぞれ平成 4 年、同 8 年に上峰町教育委員会が調査。現在整理中

3) 下山正一・西田民雄「II. 佐賀県上峰町周辺の地形と地質」「佐賀平野の阿蘇 4 火砕流と埋没林」上峰町文化財調査報告書第11集 上峰町教育委員会 1994



Fig. 2 坊所二本松遺跡周辺地形図および調査区位置図 (1/5,000)

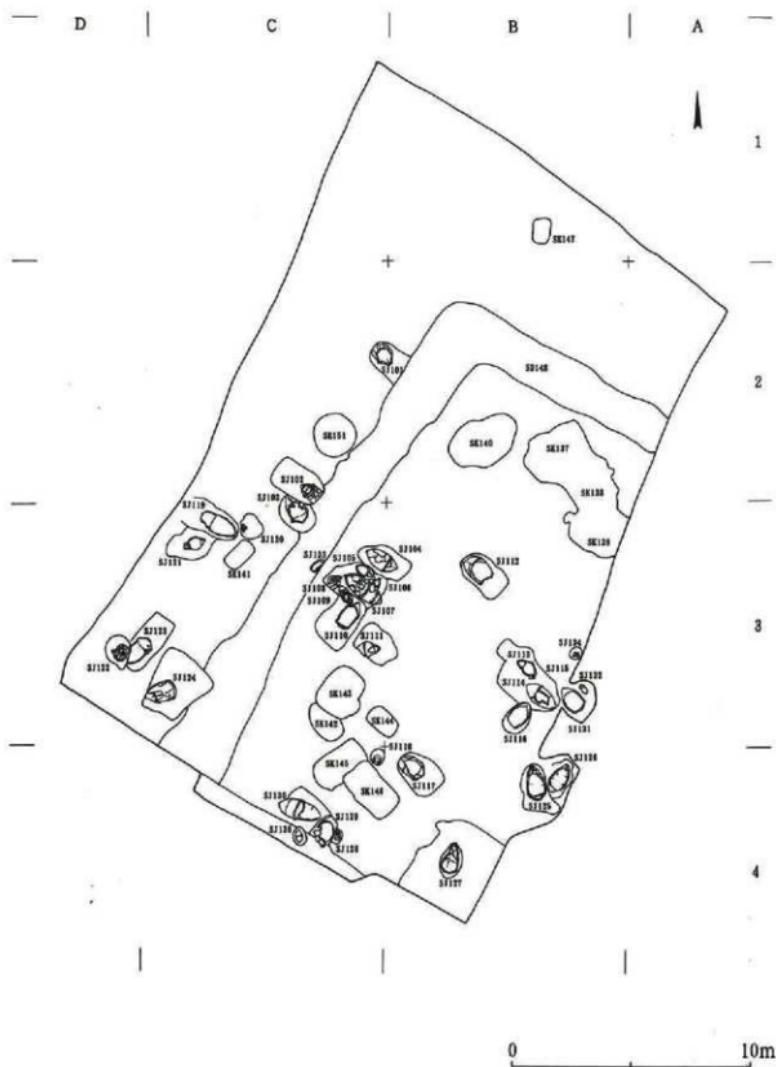


Fig. 3 坊所二本松遺跡 1 区遺構配置図 (1/200)

IV. 遺構

今回の現場における調査の時点で遺構として発掘作業を行ったものは、弥生時代中期の壺棺墓35基、土塙12基、中世の井戸跡1基、溝跡1条の合計49遺構とそのほかビットであった。

ここでは、壺棺墓35基、土塙11基、井戸跡1基、溝跡1条について図示し、報告したい。

1. 壺棺墓 (Fig. 4 ~ 32・PL. 3 ~ 5・Tab. 1)

今回の調査では、35基の壺棺墓が検出された。いずれも後世の耕作などにより棺の一部を失っており、完全な形で残っていたものは皆無であった。

被葬者用別にみると、成人用19基、小児用16基に分類できる。壺棺墓の形式としては確認できたものは、すべて上下の壺と蓋を組み合わせる複式棺である。また、上下の壺の組合せも、挿入式あるいは上壺が下壺内に落ち込んだものと思われる SJ-117を除くと、接口式を探っている。

また、壺棺の器種については上下の組合せが確認できるものについてみると、

- ①砲弾形の大型壺を下壺とし、大型鉢を上壺とした成人棺と考えられるもの。SJ-101、SJ-102、SJ-103、SJ-104、SJ-110、SJ-112、SJ-114、SJ-117、SJ-123、SJ-125、SJ-126、SJ-129、SJ-131など13基。
- ②上下砲弾形の大型壺を組合せた成人棺と考えられるもの。SJ-107、SJ-119、SJ-130など3基。
- ③載單卵形の大型壺を下壺とし、砲弾形またはいちじく形の小形壺を上壺とした小児棺と考えられるもの。SJ-108、SJ-111、SJ-113、SJ-121など4基。
- ④上下砲弾形またはいちじく形の小形壺を組合せた小児棺と考えられるもの。SJ-105、SJ-107、SJ-109、SJ-118、SJ-134、SJ-136など6基

の4種の組み合わせがみられる。

一方、調査区内の壺棺墓の分布をみると、SJ-101を北限とし、調査区中央より南部分布にしており、ここで検出されたものに限っていえば、墓域の範囲は東側、南側及び西側へ拡がることが予想され (Fig. 3 参照)、実際、調査区東側の農道を挟んだ畑には壺棺の破片が散布している。南側は、下段の畑との間に高さ約1.2mのブロック擁壁が築かれており、確認調査の結果からも丘陵の斜面を二段の畑とする際に削平され失われたことががうかがわれる。

さらに今回の調査で検出された壺棺墓は、特異なグルーピングを示しているのが注目される。SJ-101、SJ-112、SJ-117、SJ-127など周囲から離れて単独で埋葬されたものもあるが、墓地を営むにあたりスペースの上では比較的余裕があるにもかかわらず、成人棺である SJ-102、SJ-107、SJ-114、SJ-123、SJ-125、SJ-128の周囲には、成人棺や小児棺が墓壇を接したり、共有したり、切り合ったりした形で集中して埋葬されており、それぞれ一群としてまとまりを見せてている。

棺内部に副葬品をはじめとする遺物、人骨などは皆無であったが、壺棺分布域の北東部に SK-137~SK-140の祭祀土壙と考えられる土壙群が検出されている。

以下、調査した壺棺墓の概要を報告する。なお、記述中の主軸方位は上壺を基準とした。

Tab. I 出土甕棺墓一覧表

甕棺墓番号	甕棺形式	組合せ器種(上・下)	成人・小児用の別	墓壇規模(m)			方位上塚基準	傾斜	備考
				長さ	幅	深さ			
SJ-101	接口式	鉢・甕	成人用	1.55 1.35	1.22 0.86	0.39 0.45	N- 138 °-E 19°	SD-148に切られる	
SJ-102	〃	〃	〃	2.24 1.47	1.42 (1.0)	0.30 0.81	N- 53 °-W 36°	SJ-103に切られる	
SJ-103	〃	〃	〃	1.65 1.41	1.24 1.15	0.30 0.57	N- 146 °-E 15°	SJ-102を切っている	
SJ-104	〃	〃	〃	2.20	1.20	0.54	N- 115 °-E 1°	粘土目張り	
SJ-105	〃	甕・甕	小児用	0.89 0.63	(0.6) (0.7)	0.20 0.35	N- 46 °-W 26°	粘土目張り SJ-106より新しい	
SJ-106	〃	〃	〃	0.9	(0.7)	(0.2)	N- 40 °-E 21°	粘土目張り SJ-107より新しい	
SJ-107	〃	〃	成人用	2.32 2.61	(1.7) 0.94	0.30 0.77	N- 53 °-W 31°	粘土目張り SJ-108に切られる	
SJ-108	〃	〃	小児用	2.10	(1.4)	(0.3)	N- 124 °-W 7°	SJ-107を切っている SJ-108に切られる	
SJ-109	〃	〃	〃	0.72	(0.5)	0.25	N- 140 °-E 30°	SJ-107、SJ-108、SJ-110を切っている SJ-109に切られる	
SJ-110	〃	鉢・甕	成人用	2.29 1.52	1.56 1.11	0.35 0.53	N- 138 °-W 24°	SJ-107を切っている SJ-109に切られる	
SJ-111	〃	甕・甕	小児用	1.89 1.22	1.26 0.93	0.47 0.60	N- 89 °-E 28°	粘土目張り	
SJ-112	〃	鉢・甕	成人用	2.05 +0.17	1.26	0.71	N- 127 °-E 27°	粘土目張り	
SJ-113	〃	甕・甕	小児用	1.58	1.05	0.12	N- 55 °-W 11°	粘土目張り SJ-114を切っている	
SJ-114	〃	鉢・甕	成人用	2.94 2.29	2.43 1.35	0.42 0.77	N- 55 °-W 3°	粘土目張り SJ-113に切られる	
SJ-115	〃	-・甕	小児用	—	—	—	N- 103 °-W 47°	SJ-113より新しい	
SJ-116	〃	(鉢)・甕	成人用	1.51	0.96	0.52	N- 149 °-W 30°		
SJ-117	挿入式?	鉢・甕	〃	1.94 1.27	1.30 1.09	0.50 0.76	N- 128 °-E 29°		
SJ-118	接口式	甕・甕	小児用	0.71	0.59	0.39	N- 19 °-E 33°		
SJ-119	〃	甕・甕	成人用	2.34	1.14	0.53	N- 58 °-W 11°	SJ-121に切られる	
SJ-120	〃	-・甕	小児用	1.07	0.97	0.14	N- (117) °-W —		
SJ-121	〃	甕・甕	〃	1.89 1.24	1.88 0.97	0.42 0.37	N- 110 °-W 13°	SJ-119を切っている	
SJ-122	—	-・甕	〃	1.33	1.12	0.14	N- 12 °-E 22°	SJ-122を切っている	
SJ-123	接口式	鉢・甕	成人用	2.59 1.26	(1.2) 1.00	0.61 0.77	N- 40 °-E 26°	SJ-122に切られる	
SJ-124	—	-・甕	〃	(2.0) 2.37	1.60 1.21	0.34 0.70	N- 75 °-E 24°		
SJ-125	接口式	鉢・甕	〃	1.74	—	0.44	N- 167 °-E 16°		
SJ-126	〃	〃	〃	1.46	0.93	0.45	N- 149 °-W 7°		
SJ-127	—	-・甕	〃	1.41	0.92	0.36	N- 162 °-W 21°		
SJ-128	—	-・〃	小児用	0.62	(0.6)	0.08	N- 12 °-E —	SJ-129に切られる	
SJ-129	接口式	鉢・甕	成人用	1.55 1.34	1.40 0.85	0.53 0.84	N- 151 °-W 3°	SJ-128、SJ-130を切っている SJ-129に切られる	
SJ-130	〃	甕・甕	〃	1.26	0.81	0.52	N- 109 °-E 27°	SJ-129に切られる	
SJ-131	—	-・甕	〃	1.26	0.81	0.52	N- 133 °-E 29°		
SJ-132	—	-・〃	小児用	0.42	0.30	0.06	N- 146 °-E 23°		
SJ-133	—	-・〃	成人用	0.88	0.76	0.40	N- 104 °-W 36°		
SJ-134	接口式	甕・甕	小児用	0.52	0.47	0.05	N- 103 °-W 0°		
SJ-136	〃	〃	〃	0.65 (0.3)	0.60 (0.2)	0.40 0.45	N- 117 °-E 36°	粘土目張り	

SJ-101 (Fig. 4 • PL. 3 - 1)

B - 2 Gr. と C - 2 Gr. の境界で検出された成人用槨棺墓である。今回の調査において検出された槨棺墓のうち最も北に位置するもので、単独で埋葬されている。後世の削平により上下の窓の一部を失っている。また、一次墓壙の東側を SD-148 に切られている。

幅 1.22m の隅丸方形の一次墓壙が長さ 1.55m 遺存しており、長軸方向西側にさらに長さ 1.35m、0.86m、深さ 0.06m の二次墓壙が掘り込まれている。上蓋は大型鉢、下蓋は砲弾形の大型甕を使用した接口式の複式棺である。傾斜角度は 19°、主軸は N - 138° - E を計る。

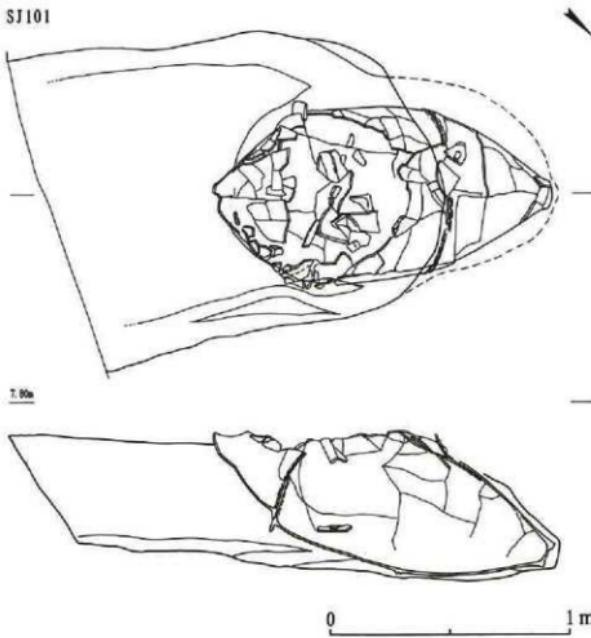


Fig. 4 棚棺墓実測図(1) SJ-101 (1/20)

SJ-102 (Fig. 5 • PL. 3 - 2)

C-2 Gr. で検出された成人用墓棺墓で、SJ-103に墓壙の一部を切られている。SJ-103と共に一群をなす。後世の削平により上下の壙の一部を失っている。

一次墓壙は、長軸2.24m、幅1.42m、深さ0.30mの隅丸方形に近い墓壙で、長軸方向東側にさらに長さ1.47m、幅約1.0m、深さ0.51mの二次墓壙が掘り込まれている。墓棺は、上壙は大型鉢、下壙は砲弾形の大型壙を使用した接口式の複式棺である。傾斜角度は36°、主軸はN-53°-Wを計る。

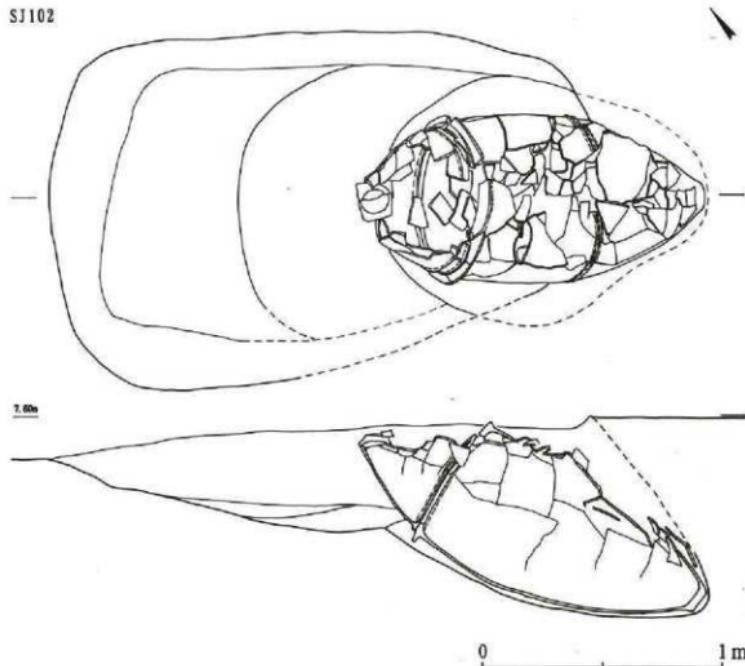


Fig. 5 墓棺基実測図(2) SJ-102 (1/20)

SJ-103 (Fig. 6 • PL. 3 - 2)

C-2 Gr. と C-3 Gr. の境界で検出された成人用斎棺墓で、SJ-102の墓壙の一部を切っている。SJ-102と共に一群をなす。後世の削平により上下の蓋の一部を失っている。

一次墓壙は、長軸1.65m、幅1.24m、深さ0.30mの楕円形の墓壙で、長軸方向西側にさらに長さ1.41m、幅1.15m、深さ0.27mの二次墓壙が掘り込まれている。斎棺は、上蓋は大型鉢、下蓋は突弾形の大型甕を使用した接口式の複式棺である。傾斜角度は15°、主軸はN-146°-Eを計る。

SJ103

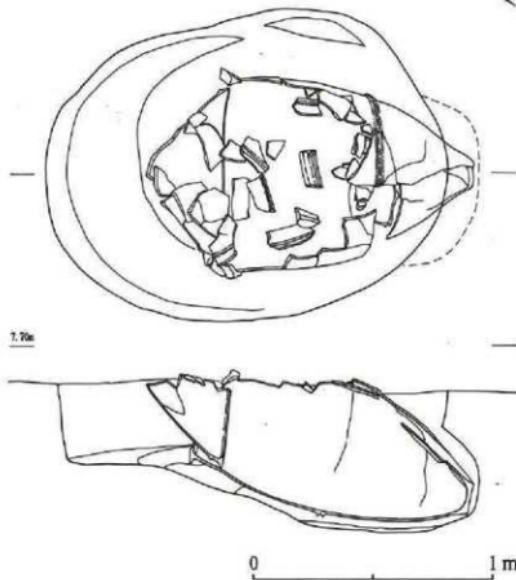


Fig. 6 斎棺墓実測図(3) SJ-103 (1/20)

SJ-104 (Fig. 7 • PL. 3 - 5、6)

B - 3 Gr. • C - 3 Gr. の境界で検出された成人用甕棺墓で、墓壙南側がSJ-107の墓壙と接している。SJ-105 ~ SJ-110と共に一群をなす。後世の削平により上下の甕の上半部を失っている。おそらく棺体が潰れたときに混入したのであろう、棺内より小児用甕棺墓として使用されたと思われる小甕甕が1個体出土している。

墓壙は、長軸2.20m、幅1.20m、深さ0.54mの不整規円形を呈す。甕棺は、上甕は大型鉢、下甕は弛張形の大甕を使用した接口式の複式棺で、接合部には粘土による目張りが施されている。ほぼ水平に埋置され、主軸は N - 115' - E を計る。

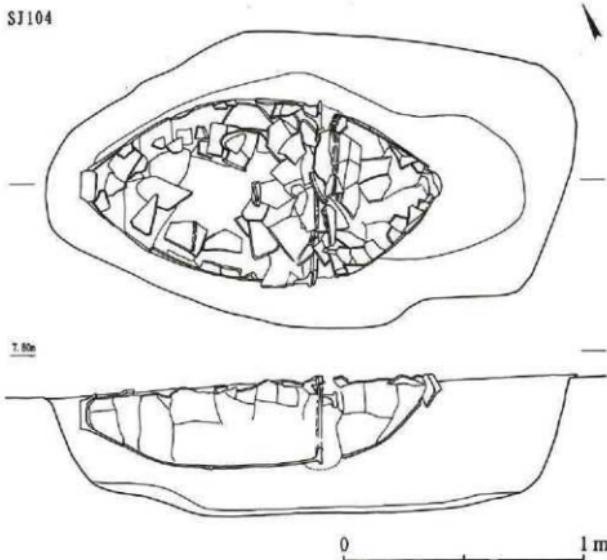


Fig. 7 甕棺墓実測図(4) SJ-104 (1/20)

SJ-105 (Fig. 8 • PL. 3 - 3 ~ 6)

C - 3 Gr. で検出された小児用甕棺墓で、SJ-107の墓壙北辺に位置し、SJ-107を中心とした一群なす。後世の削平により上下の甕の一部を失っている。

本甕棺の下甕先端は、同じく SJ-107 の墓壙内に埋葬された小児用棺 SJ-106 の下部に達している。SJ-107 の上部にあって破壊されていないこと、本甕棺墓の下甕先端が SJ-106 の墓壙によって破壊されていないことから SJ-107 → SJ-106 → SJ-105 の順に埋葬されたものと考えられる。

一次墓壙は、長軸 0.8m 以上、幅約 0.6m、深さ約 0.2m の不整楕円形の墓壙で、長軸方向東側にさらに長さ 0.63 m、幅約 0.7m、深さ 0.15m の二次墓壙が掘り込まれている。甕棺は、上甕は小型甕、下甕はやや脛部が張る中型甕を使用した接口式の複式棺で、接合部には粘土による目張りが施されている。傾斜角度は 26°、主軸は N - 46° - W を計る。

SJ-106 (Fig. 8 • PL. 3 - 3 ~ 6)

C - 3 Gr. で検出された小児用甕棺墓で、SJ-107 の墓壙北東隅に位置し、SJ-107を中心とした一群なす。後世の削平により上下の甕の一部を失っている。

同じく SJ-107 の墓壙内に埋葬された小児用棺 SJ-105 の下甕先端が本甕棺の下部に達している。SJ-107 の上部にあって破壊されていないことから、SJ-107 と同時埋葬か、新しいものと考えられる。

墓壙は、長軸 0.9m 以上、幅約 0.7m、深さ約 0.2m の楕円形を呈すと推測されるが、SJ-107 の墓壙内に位置しているために明瞭な墓壙は確認できなかった。甕棺は、上下ともに小型甕を使用した接口式の複式棺で、接合部には粘土による目張りが施されている。傾斜角度は 21°、主軸は N - 40° - E を計る。

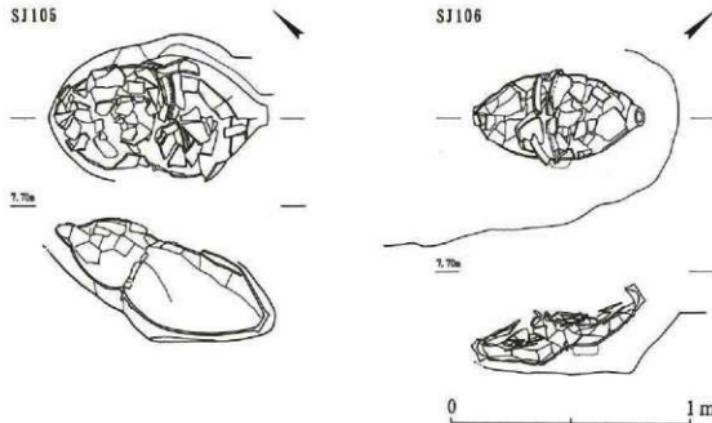


Fig. 8 甕棺墓実測図(5) SJ-105・SJ-106 (1/20)

SJ-107 (Fig. 9 + PL. 3 - 3, 4)

C-3 Gr. で検出された成人用甕棺墓である。SJ-104～SJ-110の7基からなる一群のなかでは一番初めに埋葬された甕棺墓で、この一群の核となるものである。墓壙内に SJ-105, SJ-106を伴っている。後世の削平により上蓋の上半部を失っている。おそらく棺体が潰れたときに混入したのであろう、棺内より小児用甕棺墓として使用されたと思われる小型甕が3個出土している。

一次墓壙は、長軸2.32m、幅約1.7m、深さ0.30mの不整方形の墓壙で、長軸方向東側にさらに長さ2.16m、幅0.94m、深さ0.47mの二次墓壙が掘り込まれている。甕棺は、上下ともに砲弾形の大型甕を使用した接口式の複式棺で、接合部には粘土による目張りが施されている。傾斜角度は31°、主軸はN-53°-Wを計る。

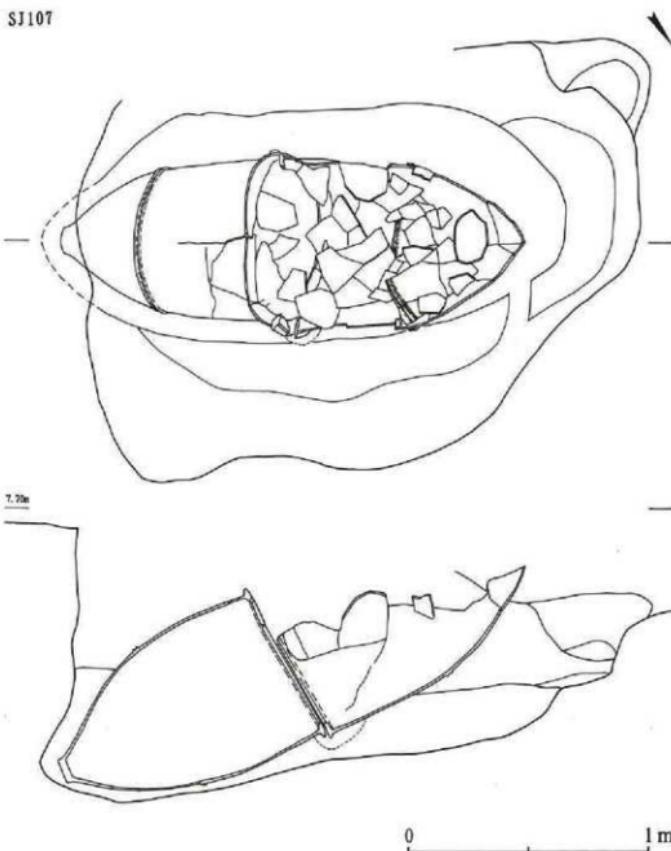


Fig. 9 甕棺墓実測図(6) SJ-107 (1/20)

SJ-108 (Fig.10・PL. 3 - 5、6)

C - 3 Gr. で検出された小児用壺棺墓で、SJ-107を中心とした一群なす。SJ-107の西側に位置し、SJ-107の墓壙を一部切っている。後世の削平により上壺のほとんどと下壺の大半を失っている。

墓壙は長軸2.10m、幅1.4m、深さ約0.3mの不整形を呈す。壺棺は、上壺は小型壺、下壺は截頭卵形の大型壺を使用した接口式の複式棺である。棺体は、墓壙の長軸と約30°の角度をもって埋置され、傾斜角度は7°、主軸はN-124°-Wを計る。

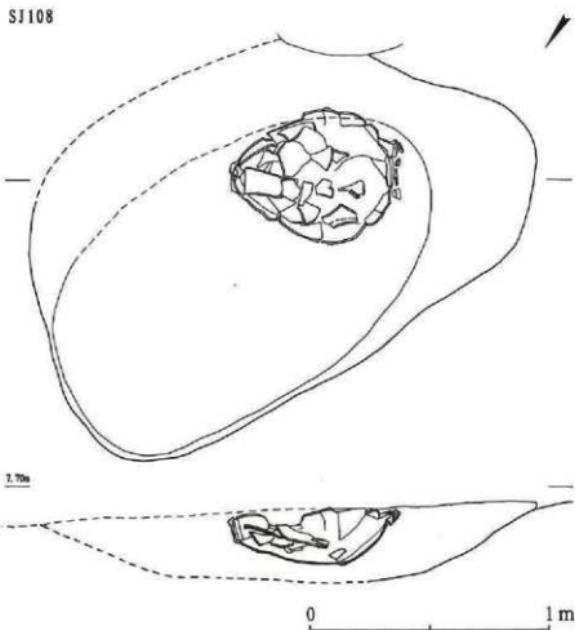


Fig.10 壺棺墓実測図(7) SJ-108 (1/20)

SJ-109 (Fig.11・PL. 3 - 4 ~ 6)

C-3 Gr. で検出された小児用斎棺墓で、SJ-107を中心とした一群なす。SJ-107、SJ-108、SJ-110の各墓壙にまたがっており、この一群のなかでは最も新しく埋葬された斎棺墓の一つである。後世の削平により上蓋の一部を失っている。

一次墓壙は確認できず、二次墓壙は長さ0.72m、幅約0.5m、深さ0.25mを計る。斎棺は、上下ともに小型斎を使用した接口式の複式棺である。傾斜角度は30°、主軸はN-140°-Eを計る。

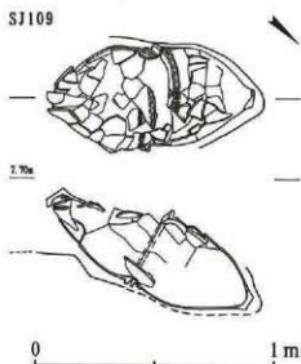


Fig.11 斎棺墓実測図(8) SJ-109 (1/20)

SJ-110 (Fig.12・PL. 3 - 5、6)

C-3 Gr. で検出された成人用喪棺墓で、SJ-107を中心とした一群なす。SJ-107の南側に位置し、SJ-107の墓壙を一部切っている。後世の削平により上蓋のほとんどと下蓋の一部を失っている。

一次墓壙は長軸2.20m、幅1.56m、深さ約0.35mの隅丸方形の墓壙で、長軸方向東側にさらに長さ1.52m、幅1.11m、深さ0.18mの二次墓壙が掘り込まれている。喪棺は、上蓋は大型鉢、下蓋は砲弾形の大型甕を使用した接口式の複式棺である。傾斜角度は24°、主軸はN-138°-Wを計る。

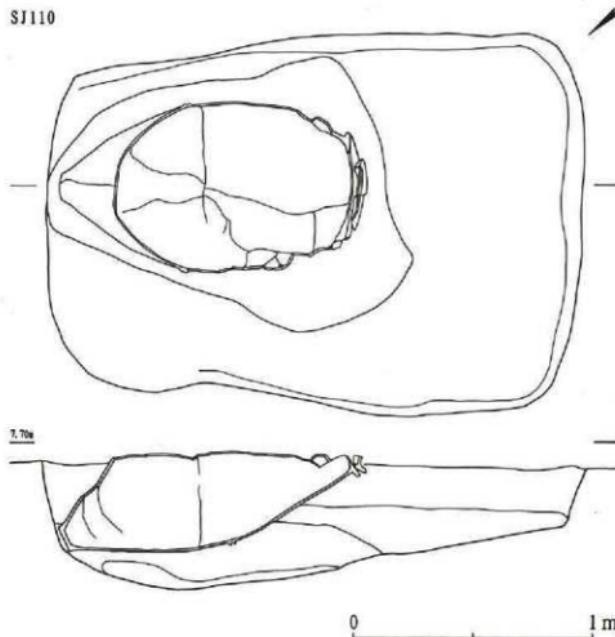


Fig.12 喪棺墓実測図(9) SJ-110 (1/20)

SJ-111 (Fig.13・PL. 3-7)

B-3 Gr.とC-3 Gr.の境界で検出された小児用槨棺墓である。SJ-107を中心とした一群の南東部に位置する。後世の削平により上蓋の大半と下蓋の一部を失っている。

一次墓壙は長軸1.80m、幅1.26m、深さ0.47mの隅丸不整方形の墓壙で、墓壙南西隅に長さ1.22m、幅0.93m、深さ0.13mの二次墓壙が掘り込まれている。槨棺は上蓋は小型壺、下蓋は截頭卵形の大型壺を使用した接口式の複式棺で、接合部には粘土による目張りが施されている。棺体は、墓壙の長軸と約45°の角度をもって埋置され、傾斜角度は28°、主軸はN-89°-Eを計る。

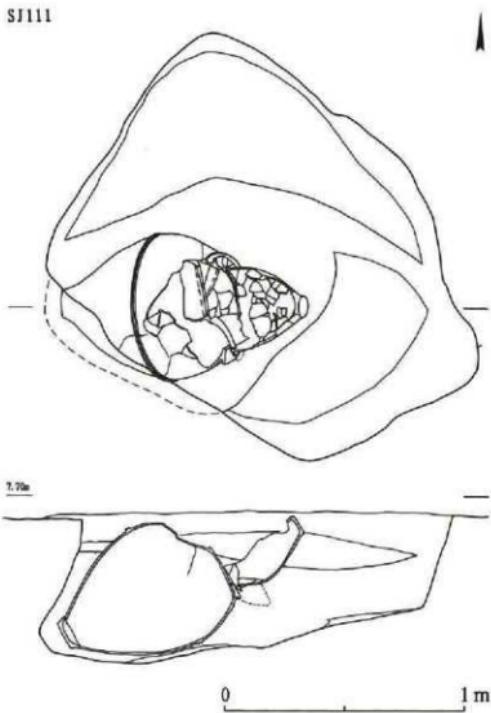


Fig.13 棺槨墓実測図 SJ-111 (1/20)

SJ-112 (Fig.14・PL. 3-8)

B-3 Gr.で検出された成人用壺棺墓で、単独で埋葬されている。後世の削平により上蓋の大半と下蓋の一部を失っている。

一次墓壙は長軸2.05m、幅1.26m、深さ約0.71mの隅丸方形の墓壙で、長軸方向西側壁を0.17m掘りくぼめ二次墓壙としている。壺棺は上蓋は大型鉢、下蓋は砲弾形の大型甕を使用した接口式の複式棺で、接合部には粘土による目張りが施されている。傾斜角度は27°、主軸はN-127°-Eを計る。

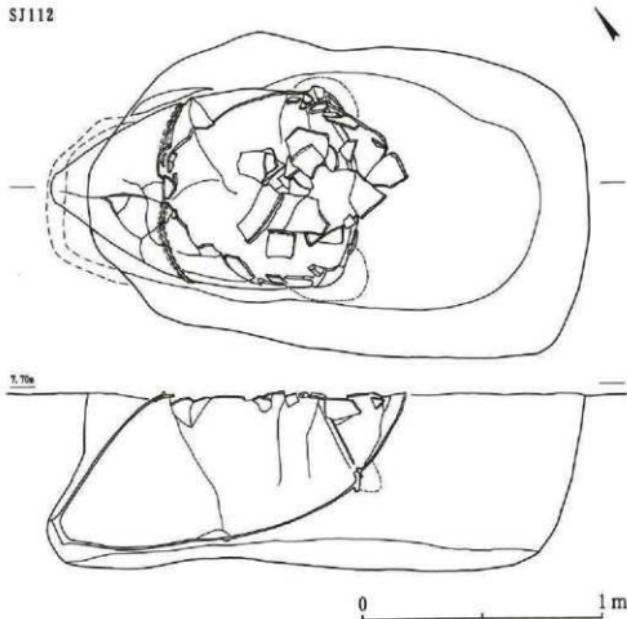


Fig.14 壺棺墓実測図(1) SJ-112 (1/20)

SJ-113 (Fig.15・PL. 4 - 1)

B-3 Gr. で検出された小児用壺棺墓である。SJ-114を中心とした一群をなすもので、SJ-114の墓壙北西部に位置している。SJ-114の墓壙内にあり、棺体が残っていることから SJ-114より新しいものと考えられる。後世の削平により上壺の大半と下壺の一部を失っている。

一次墓壙は長軸 1.5m、幅 1.0m、深さ約 0.12m の方形の墓壙と推定される。二次墓壙は SJ-114の墓壙内に掘り込まれており、明確に確認できなかった。壺棺は上壺は小型壺、下壺は截頭卵形の大型壺を使用した接口式の複式棺で、接合部には粘土による目張りが施されている。傾斜角度は 11°、主軸は N-55°-W を計る。

SJ113

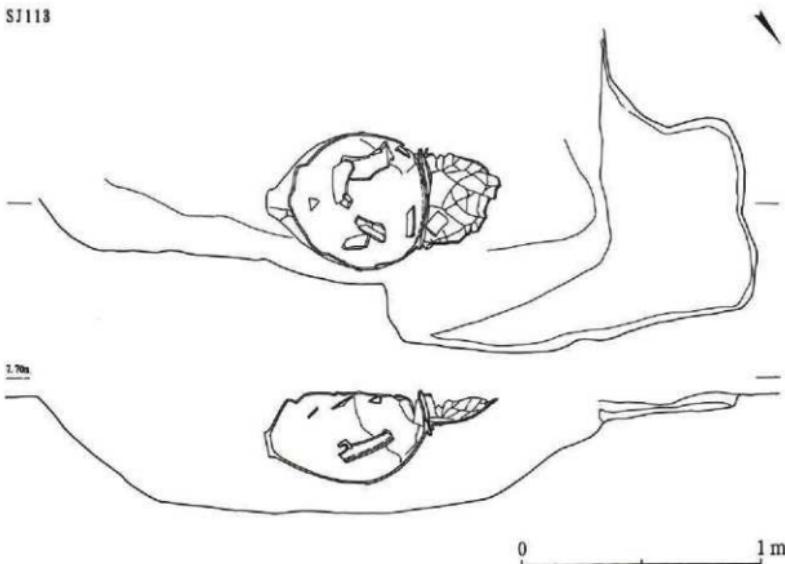


Fig.15 壺棺墓実測図 SJ-113 (1/20)

SJ-114 (Fig.16・PL. 4 - 1)

B - 3 Gr. で検出された成人用壺棺墓である。この SJ-114を中心とする SJ-113、SJ-115、SJ-116、SJ-131、SJ-132、SJ-134の 7基が一群をなしている。墓壙内に SJ-113、SJ-115の棺体が含まれているが、いずれも SJ-114より新しい。後世の削平により上下の壺の一部を失っている。

一次墓壙は長軸 2.94、幅 2.43m、深さ 0.42m の不正な方形の墓壙で、さらに長軸方向東側に長さ 2.29m、幅 1.35m、深さ 0.35m の二次墓壙が掘り込まれている。壺棺は上壺は大型鉢、下壺は砲弾形の大型壺を使用した接口式の複式棺で、接合部には粘土による目張りが施されている。傾斜角度は 3°、主軸は N-55°-W を計る。

SJ114

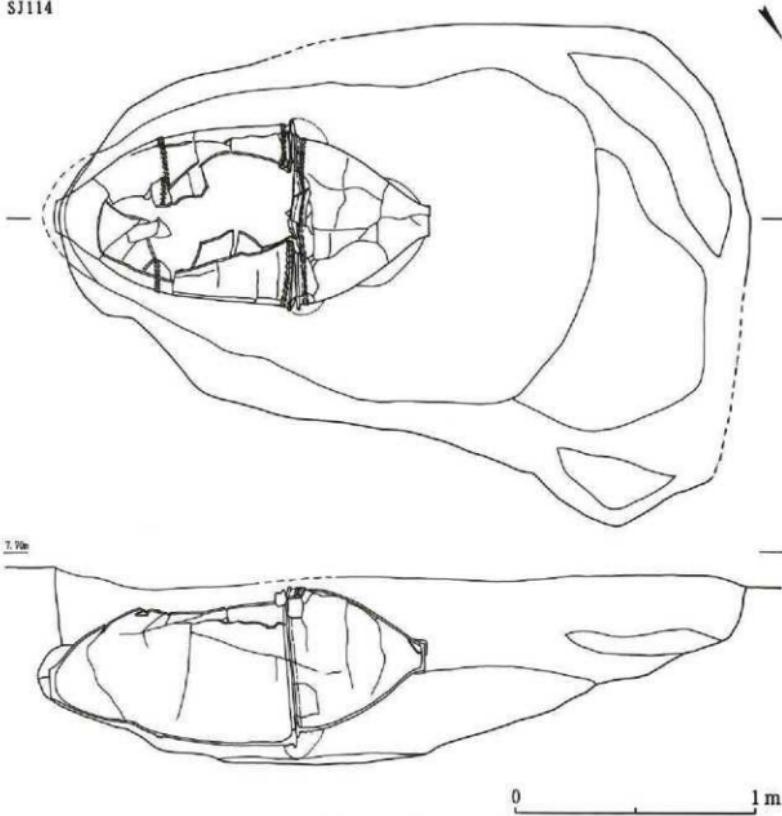


Fig.16 壺棺墓実測図(3) SJ-114 (1/20)

SJ-115 (Fig.17・PL. 4 - 1)

B-3 Gr. で検出された小児用壺棺墓である。SJ-114を中心とした一群をなす。SJ-113同様、SJ-114の墓壙内に位置し、SJ-114より新しいものの一つである。後世の削平により墓壙、棺体のほとんどを失っており、下壙底部付近が一部遺存している。

SJ-113、SJ-114の墓壙内に位置しているために明確な墓壙は確認できなかった。下壙は小型壙で、遺存部から推定すると、傾斜角度は47°、主軸はN-103°-Wを計る。

SJ-116 (Fig.17・PL. 4 - 1)

B-3 Gr. で検出された成人用壺棺墓である。SJ-114を中心とした一群をなす。SJ-114の墓壙に二次墓壙の先端部が切られている。後世の削平により一次墓壙、上壙を失っており、下壙体部以下が遺存している。

二次墓壙は横円形を呈し、遺存部で長軸1.51m、幅0.96m、深さ0.52mを計る。上壙は下壙棺内に落ち込んだ破片から大型鉢と推定され、下壙は砲弾形の大型壺を使用した接口式の複式棺である。傾斜角度は30°、主軸はN-149°-Wを計る。

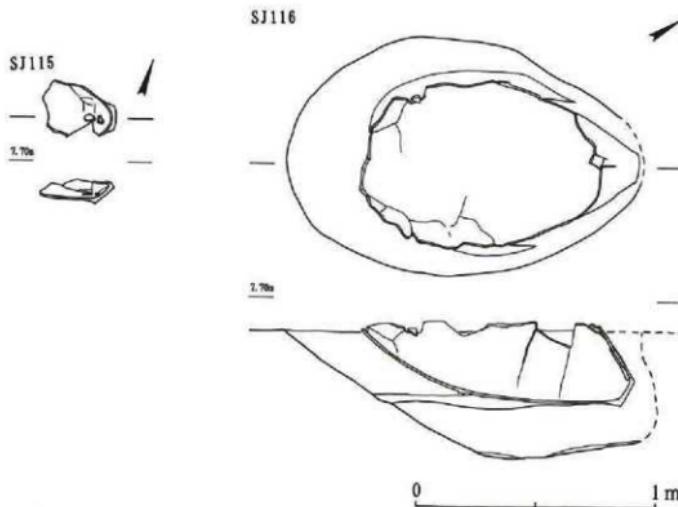


Fig.17 壺棺墓実測図04 SJ-115・SJ-116 (1/20)

SJ-117 (Fig.18・PL. 4 - 2)

B - 4 Gr. で検出された成人用喪棺墓で、単独で埋葬されている。後世の削平により上蓋の大半と下蓋の一部を失っている。

一次墓壙は長軸1.94m、幅1.30m、深さ0.50mの隅丸方形の墓壙で、さらに長軸方向西側へ長さ1.27m、幅1.09m、深さ0.26mの二次墓壙が掘り込まれている。喪棺は上蓋は大型鉢、下蓋は砲弾形の大型甕を使用している。複式棺であるが、上蓋の大型鉢が下蓋内にずり落ちた形で検出されており接口式か挿入式かは不明である。傾斜角度は29°、主軸はN-128°-Eを計る。

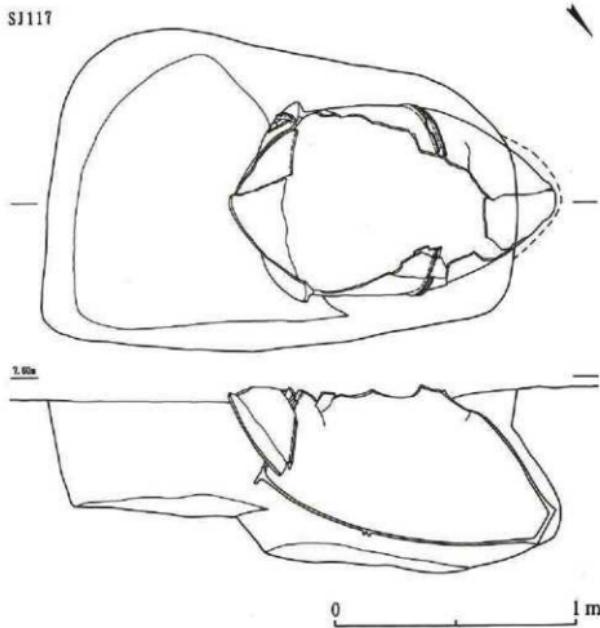


Fig.18 喪棺墓実測図(5) SJ-117 (1/20)

SJ-118 (Fig.19・PL. 4 - 3)

C-4 Gr. で検出された小児用甕棺墓で、SJ-117の西方に単独で埋葬されている。後世の削平により上甕の大半と下甕の一部を失っている。

墓壙は長軸0.71m、幅0.59m、深さ0.39mの楕円形呈す。甕棺は上下ともに小型甕を使用した接口式の複式棺である。傾斜角度は33°、主軸はN-19°-Eを計る。

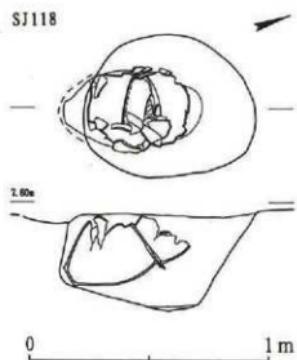


Fig.19 甕棺墓実測図 SJ-118 (1/20)

SJ-119 (Fig.20・PL. 4-4)

C-3 Gr. で検出された成人用妻棺墓で、SJ-120, SJ-121との3基からなる一群の核となる妻棺墓である。後世の削平により一次墓壙及び上臺の大半と下臺の一部を失っている。

確認できる墓壙は長軸2.34m以上、幅1.14m、深さ0.53mの不整の圓丸長方形のを呈す。妻棺は上下ともに砲弾形の大型妻を使用した複式棺である。傾斜角度は11°、主軸はN-58°-Wを計る。

SJ119

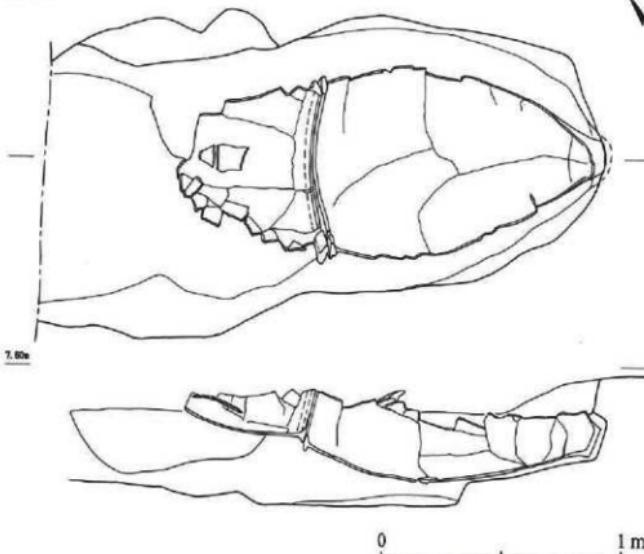


Fig.20 妻棺墓実測図⑩ SJ-119 (1/20)

SJ-120 (Fig.21・PL. 4-4)

C-3 Gr.で検出された小児用壺棺墓で、SJ-119を中心とする一群をなす。後世の削平により一次墓壙墓壙、棺体のほとんどが失われており、下壺と思われる胸部片が一部遺存している。

墓壙は、長軸1.07m、幅0.97m、深さ0.14の不整な円形の掘り込みを伴っているが、棺体の遺存状況からして、別の掘り込みである可能性も否定できない。遺存している下壺は小型壺で、傾斜角度は不明、主軸は、破片の方に向から推定するとN-117-Wである。

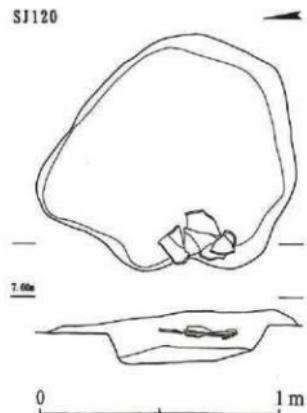


Fig.21 壺棺墓実測図(1/20) SJ-120 (1/20)

SJ-121 (Fig.22・PL. 4-4)

C-3 Gr.で検出された小児用壺棺墓で、SJ-119を中心とする一群をなす。後世の削平により一次墓壙及び上壺の大半と下壺の約半分を失っている。SJ-119の墓壙を切っている。

一次墓壙は長軸1.89m、幅1.88m、深さ0.14mの張出をもつ円形を呈し、その中にさらに長さ1.24m、幅0.97m、深さ0.23mの二次墓壙が掘り込まれている。壺棺は上壺が小型壺、下壺が截頭卵形の大型壺を使用した接口式の複式棺である。傾斜角度は13°、主軸はN-110°-Wを計る。

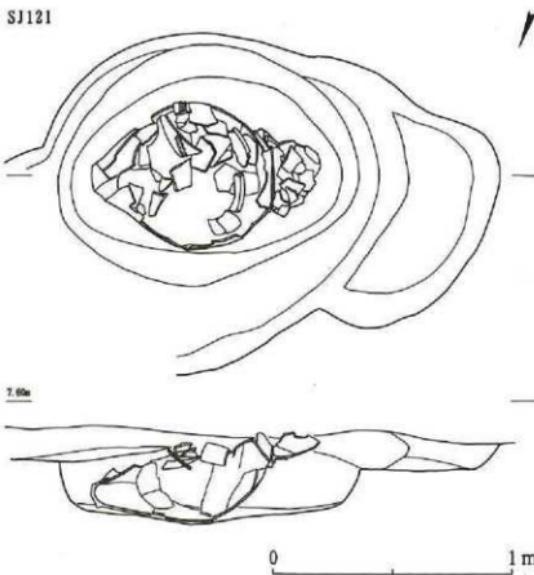


Fig.22 壺棺墓実測図(1) SJ-121 (1/20)

SJ-122 (Fig.23・PL. 4 - 5)

D-3 Gr.で検出された小児用壺棺墓で、今回の調査において検出された壺棺墓のうち最も南に位置する壺棺墓である。SJ-123, SJ-124との3基からなる一群をなす。後世の削平により一次墓壙及び上壺と下壺の大半を失っており、下壺の胴部片が一部遺存している。SJ-123の墓壙を切っている。

二次墓壙は、遺存部分で長軸1.33m、幅1.12m、深さ0.14mの不整の円形を呈している。壺棺は上壺は不明、下壺は載頭卵形の大型壺で、傾斜角度は22°、主軸はN-12°-Eを計る。

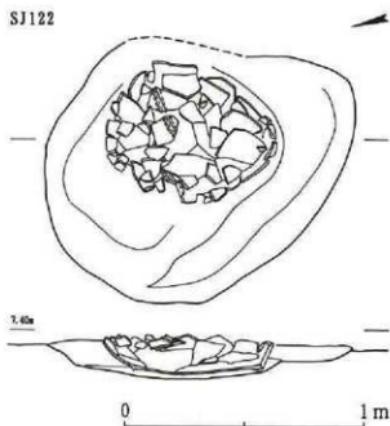


Fig.23 壺棺墓実測図④ SJ-122 (1/20)

SJ-123 (Fig.24・PL. 4 - 5、6)

C-3 Gr. と D-3 Gr. の境界で検出された成人用斂棺墓で、SJ-122、SJ-124とともに一群をなす。後世の削平により上蓋と下蓋の一部を失っており、それぞれの破片が棺内に落ち込んでいる。また一次墓壙の南東辺が近世以降の耕作溝によって失われている。墓壙の一部を SJ-122 に切られている。

一次墓壙は、長軸2.59m、幅遺存部分で約1.2m、深さ0.61mの長方形を呈し、長軸方向南側にさらに長さ1.26m、幅1.00m、深さ0.16mの二次墓壙が掘り込まれている。斂棺は上蓋が大型鉢、下蓋が砲弾形の大形甕を使用した接口式の複式棺である。傾斜角度は26°、主軸はN-40°-Eを計る。

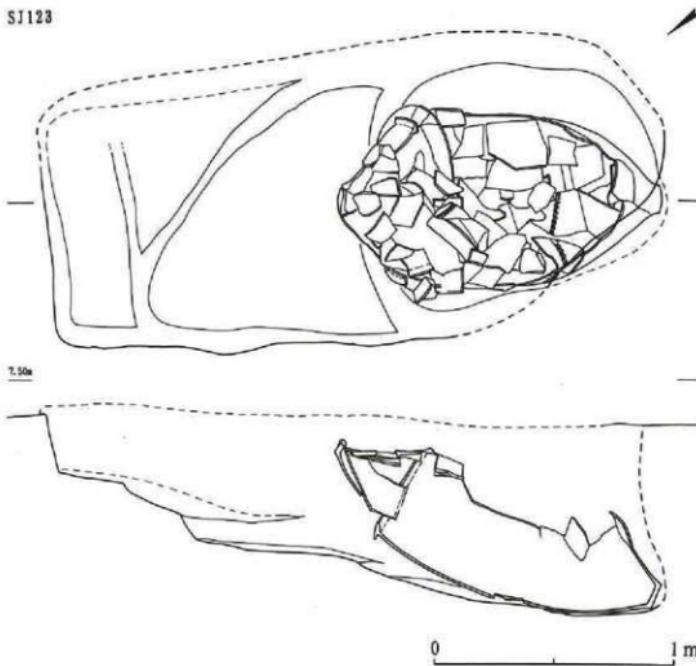


Fig.24 斎棺墓実測図(2) SJ-123 (1/20)

SJ-124 (Fig.25・PL. 4 - 5)

C-3 Gr.で検出された成人用壺棺墓で、SJ-122、SJ-123とともに一群をなす。後世の削平により下壺の一部を失っている。また上壺は引き抜かれたものか、下壺棺内に小片を残すのみである。一次墓壙も南辺、西辺が近世以降の耕作溝によって削平を受けている。おそらく棺体が潰れたときに混入したのであろう、棺内より中世土師質皿が出土している。

一次墓壙は、長軸推定 2.0m、幅1.60m、深さ0.34mの方形を呈し、一次墓壙南西隅に向かってさらに長さ2.37m、幅1.21m、深さ0.36mの二次墓壙が掘り込まれている。壺棺は上壺は不明、下壺が砲弾形の大形壺を使用した複式棺である。棺体は、一次墓壙の長軸に対し、約30°の角度をもって埋置され、傾斜角度は24°、主軸はN-75°-Eを計る。

SJ124

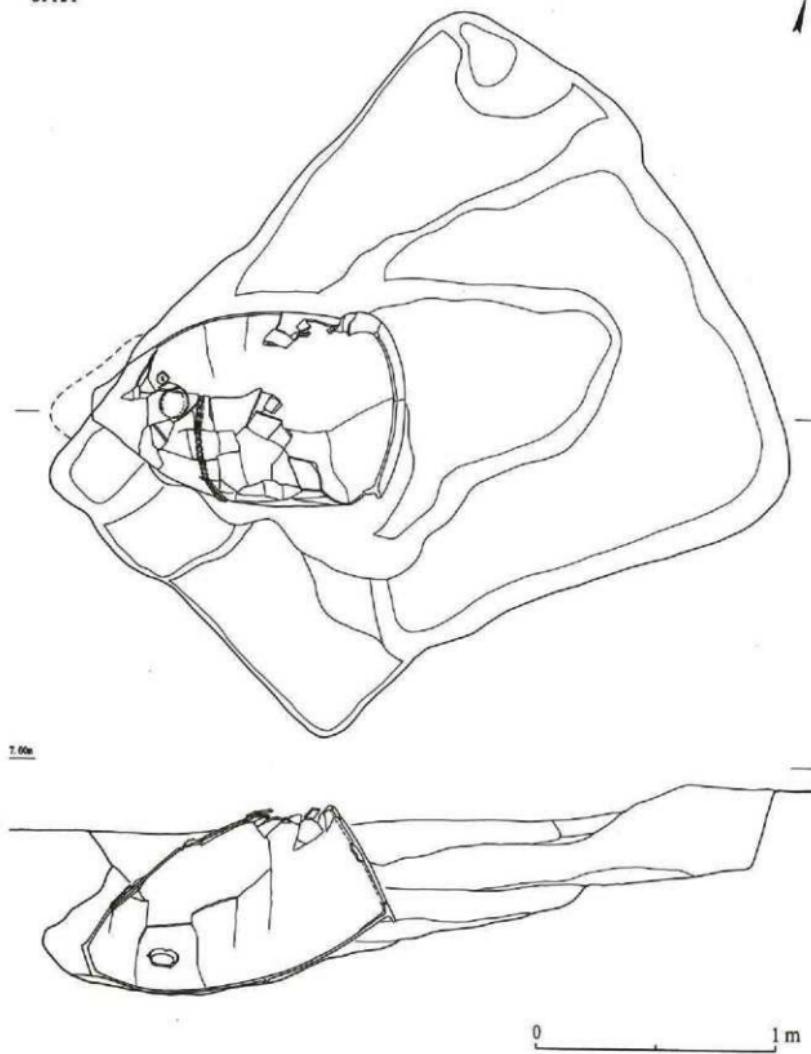


Fig.25 秦始皇陵陪葬墓 SJ-124 (1/20)

SJ-125 (Fig.26・PL. 4 - 7)

B-4 Gr.で検出された成人用壺棺墓である。SJ-126と接して埋葬されているが両者ともに一次墓壙をほとんど失っており、新旧の関係は不明である。後世の削平により一次墓壙及び上壺の大半と下壺の一部を失っている。

二次墓壙は、遺存部で、長さ1.74m、幅1.07m、深さ0.44mの楕円形を呈している。壺棺は、上壺は大形鉢、下壺は大型壺を使用した接口式の複式棺である。傾斜角度は15°、主軸はN-167°-Eを計る。

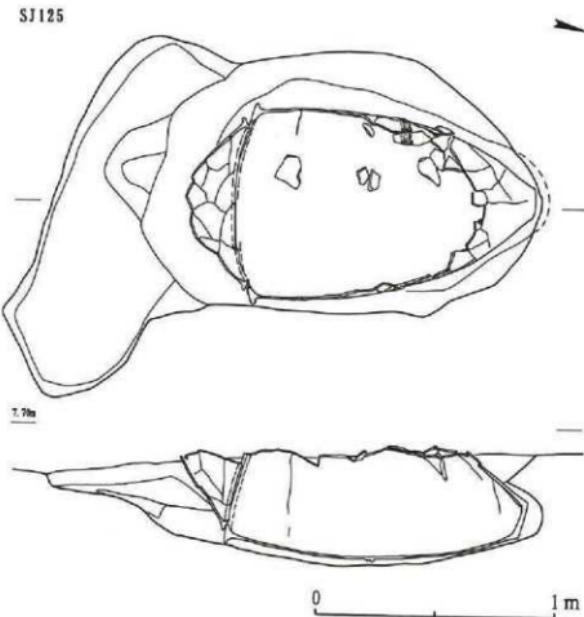


Fig.26 壺棺墓実測図 SJ-125 (1/20)

SJ-126 (Fig.27・PL. 4 - 7)

B-4 Gr. で検出された成人用壺棺墓である。SJ-125と接して埋葬されているが新旧の関係は不明である。後世の削平により一次墓壙及び上蓋の大半と下掘の約半分を失っている。

二次墓壙は、遺存部で、長さ1.46m、幅0.93m、深さ0.45mの楕円形を呈している。壺棺は、上蓋は大形鉢、下蓋は大型甌を使用した接口式の複式棺である。傾斜角度は7°、主軸はN-149°-Wを計る。

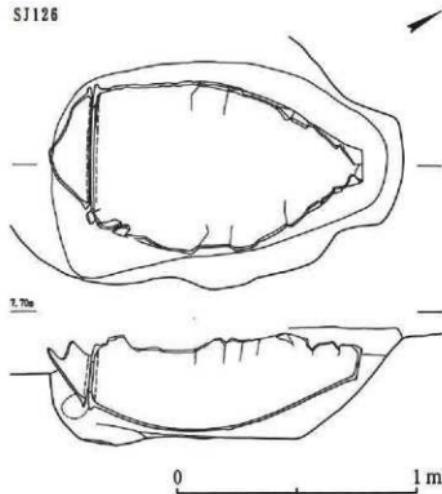


Fig.27 壺棺墓実測図26 SJ-126 (1/20)

SJ-127 (Fig.28・PL. 4 - 8)

B-4 Gr. で検出された成人用槨棺墓で、今回の調査において検出された槨棺墓のうち最も南に位置する槨棺墓である。後世の削平により一次墓壙及び上蓋は失われ、下槨の一部が遺存している。おそらく棺体が潰れたときに混入したのであろう、棺内より中国製青磁碗の破片が出土している。

二次墓壙は、遺存部で、長さ1.41m、幅0.92m、深さ0.36mの梢円形を呈している。槨棺は、上蓋は不明、下槨は砲弾形の大型槨を使用している。傾斜角度は21'、主軸はN-162°-Wを計る。

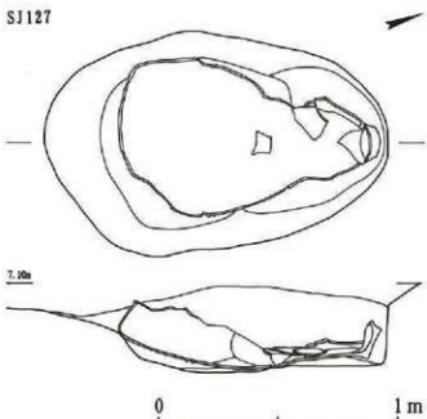


Fig.28 棚棺墓実測図④ SJ-127 (1/20)

SJ-128 (Fig.29・PL. 5 - 1, 2)

C-4 Gr. で検出された小児用壺棺墓である。SJ-129、SJ-130とともに一群をなす。後世の削平により一次墓壙及び上蓋は失われ、下蓋の一部が遺存しているが、遺存する二次墓壙の西側がさらに SJ-128 の墓壙により切られている。

二次墓壙は、遺存部で、長さ0.62m、幅推定約0.6m、深さ0.08mの円形を呈すものと推定される。壺棺は、上蓋は不明、下蓋は遺存部の器壁のカーブからすると截頭卵形の大型壺が使用されている。傾斜角度は不明、主軸はN-12°-Eを計る。

SJ-128 (Fig.29・PL. 5 - 1, 2)

C-4 Gr. で検出された成人用壺棺墓である。SJ-128、SJ-130とともに一群をなす。後世の削平及び南の縄との間に築かれたコンクリート擁壁の裏込めにより一次墓壙及び上蓋の大半と下蓋の一部が失われている。SJ-129の東西に位置する SJ-128、SJ-130の墓壙を切っている。

二次墓壙は、遺存部で長さ1.50m以上、幅0.95m、深さ0.48mの梢円形を呈すものと推定される。壺棺は、上蓋は大型鉢、下蓋は砲弾形の大型壺が使用された接口式の複式棺である。傾斜角度は3°、主軸はN-151°-Wを計る。

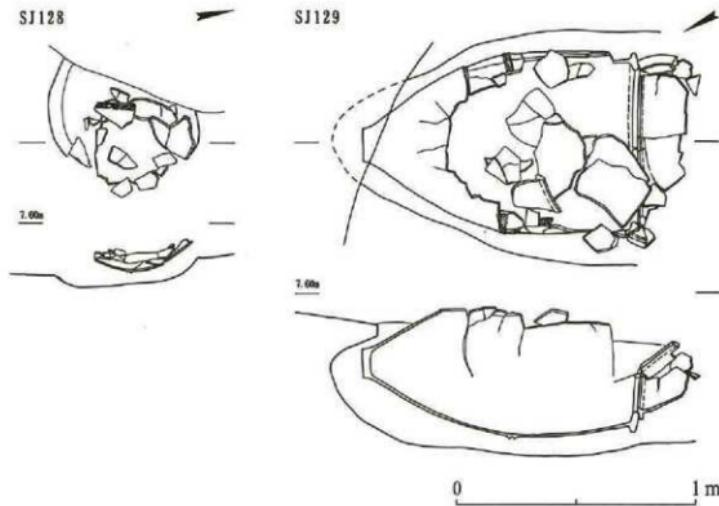


Fig.29 壺棺墓実測図29 SJ-128・SJ-129 (1/20)

SJ-130 (Fig.30 • PL. 5 - 1, 2)

C-4 Gr. で検出された成人用喪棺墓である。SJ-128、SJ-129とともに一群をなす。後世の削平及び南の畠との間に築かれたコンクリート擁壁の裏込めにより一次墓壙及び上蓋の一部が失われている。SJ-129の西に位置する SJ-129により墓壙の南東辺が切られている。おそらく棺体が潰れたときに混入したのであろう、棺内より小児用喪棺墓として使用されたと思われる小型壺の底部が出土している。

一次墓壙は遺存部で長さ1.55m以上、幅1.40m以上、深さ0.53mの方形を呈すものと推定される。二次墓壙は、一次墓壙の軸に対して、約20°の角度をもってさらに西側に掘り込まれており、長さ1.34m、幅0.85m、深さ0.31mを計る。壺棺は上下ともに砲弾形の大型壺が使用された接口式の複式棺である。傾斜角度は27°、主軸はN-109°-Eを計る。

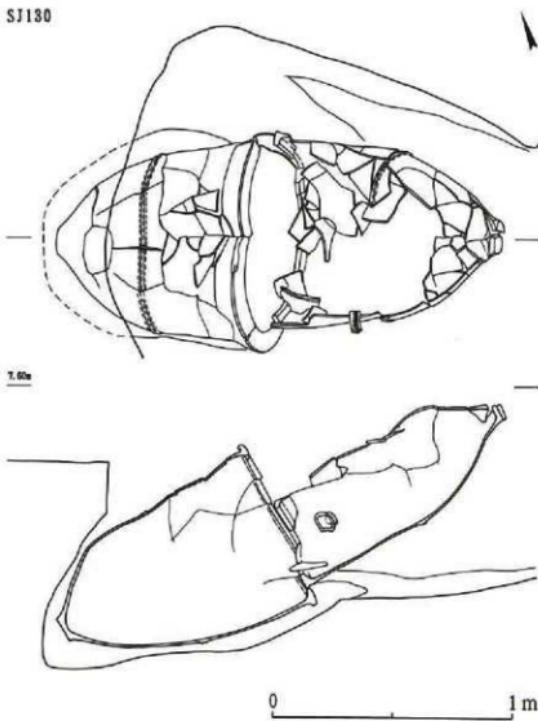


Fig.30 壑棺墓実測図(2) SJ-130 (1/20)

SJ-131 (Fig.31・PL. 5 - 3)

B-3 Gr.で検出された成人用壺棺墓で、今回の調査において検出された壺棺墓のうち最も東に位置する壺棺墓である。後世の削平により一次墓壙及び上蓋は失われ、下蓋の一部が遺存している。

二次墓壙は遺存部で長さ1.26m、幅0.81m、深さ0.52mの梢円形を呈している。壺棺は、上蓋は不明、下蓋は砲弾形の大型壺を使用している。傾斜角度は29°、主軸はN-133°-Eを計る。

SJ-132 (Fig.31・PL. 5 - 3)

B-3 Gr.で検出された小児用壺棺墓で、SJ-131の北東に位置している。後世の削平により一次墓壙及び上蓋は失われ、下蓋の一部が遺存している。

二次墓壙は遺存部で長さ0.42m、幅0.30m、深さ0.06mの梢円形を呈している。壺棺は、上蓋は不明、下蓋は小型壺を使用している。傾斜角度は23°、主軸はN-146°-Eを計る。

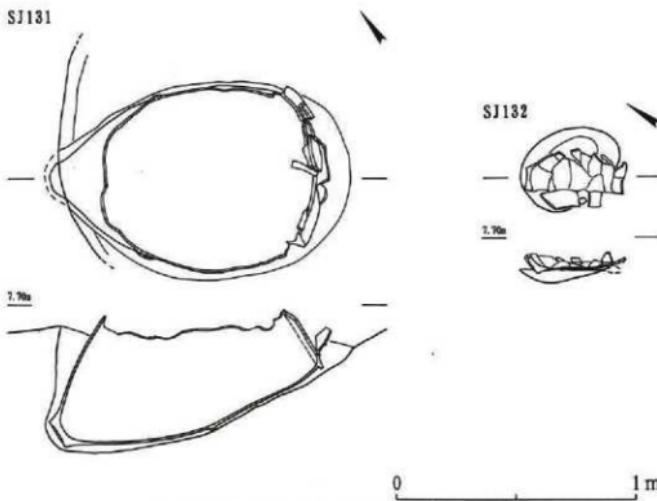


Fig.31 壺棺墓実測図② SJ-131・SJ-132 (1/20)

SJ-133 (Fig.32 • PL. 5 - 4, 5)

C-3 Gr. で検出された成人用喪棺墓である。中世溝跡 SD-148 及び後世の削平により一次墓壙及び上蓋は失われ、下蓋の一部が遺存している。

二次墓壙は遺存部で長さ 0.88m、幅 0.76m、深さ 0.40m を計る。喪棺は、上蓋は不明、下蓋は砲弾形の大型喪を使用している。傾斜角度は 36°、主軸は N-104°-W を計る。

SJ-134 (Fig.32)

B-3 Gr. で検出された小児用喪棺墓で、SJ-114 の北東に位置している。後世の削平により一次墓壙及び失われ上蓋、下蓋とともに一部が遺存しているが、棺の上下は特定できない。

二次墓壙は遺存部で長さ 0.52m、幅 0.47m、深さ 0.05m の不整な円形を呈している。喪棺は、上下ともに小型喪を使用した接口式の複式棺である。ほぼ水平に埋置され、図右が上蓋とすると、主軸は N-103°-W を計る。

SJ-136 (Fig.32 • PL. 5 - 6)

C-4 Gr. で検出された小児用喪棺墓である。後世の削平及び南の畠との間に築かれたコンクリート擁壁の裏込めにより一次墓壙の大半と上蓋の一部が失われている。SJ-130 の南に位置し、SJ-129、SJ-130 に墓壙を切らされている。

一次墓壙は遺存部で長さ 0.65m 以上、幅 0.60m 以上、深さ 0.40m、二次墓壙は推定で長さ約 0.3m、幅約 0.2m、深さ 0.05m を計る。喪棺は、上下ともに小型喪を使用した接口式の複式棺で、接合部には粘土による目張りが施されている。傾斜角度は 36°、主軸は N-177°-E を計る。

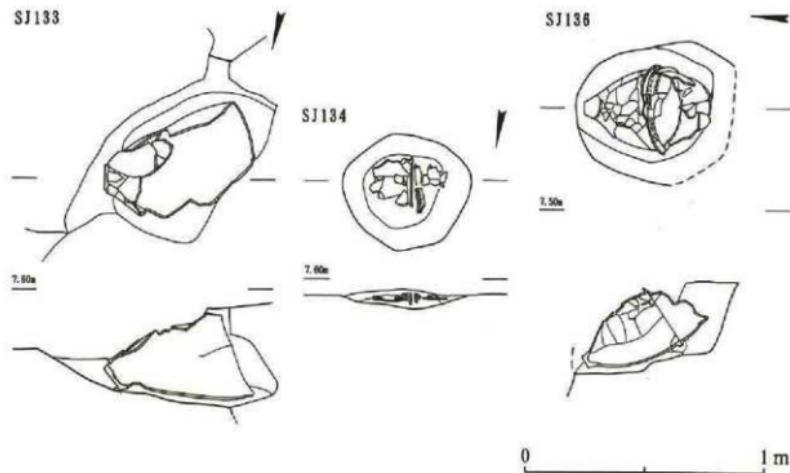


Fig.32 喪棺墓実測図④ SJ-133・SJ-134・SJ-136 (1/20)

2. 井戸跡・土壙 (Fig.33・PL. 5、 6・Tab. 2)

今回の調査では、井戸跡は1基、土壙は12基検出された。井戸跡は中世、土壙はほとんどが弥生時代中期のものと考えられる。

井戸跡 (Fig.33・PL. 5 - 7)

SE-151は、C-2 Gr. で同じく中世の溝跡 SD-148の西に接して検出された井戸跡である。平面プランは直径約1.7mの円形を呈し、約0.5mの深さで一旦掘りこぼめられた後、約1.3mの直径で円筒状に掘られている。安全を考慮し掘り下げは約1.5mまでにとめた。壁の1カ所に足場のような平面が設けられている。

ここからは、滑石製石鍋、陶質土鍋、須恵質甕、土師質皿、中国製青磁碗等が出土している。

土壙 (Fig.33・PL. 3、 6)

今回の調査で検出された土壙は、12基であった。これらは、平面形態により、

A類 不整形のプランを呈し掘り方も不規則なもの。 SK-137～SK-140

B類 方形を基調としたプランのもの。 SK-141、 SK-143～SK-147

C類 楕円形のプランのもの。 SK-142

とに分類できる。さらに、方形を基調としたB類は SK-143、 SK-145、 SK-146の面積 2 m²強の比較的大きなもの (B-1類) と、面積 1 m²に満たないもの (B-2類) とに区分できる。

また、各土壙の分布をみると、A類の土壙は中世溝 SD-148と壺棺墓域との間のB-2、3 Gr. に集中して検出されており、B-1類の土壙はC-3、4 Gr. で壺棺墓の群に囲まれる形で分布している。

出土遺物についてみると、A類の土壙からは、通常の土器に混じり器台や赤色塗彩された甕、壺などが出土しており、祭祀的性格をもった土壙と考えられる。

一方、B-1類の土壙のは、形態・規模・出土位置から、当初壺棺墓の墓壙として掘り下げを行った。結果的に棺体は検出されなかった。これらは土壙墓かとも考えられたが埋葬主体など確認はできなかった。

このほか、SK-135とした遺構がある。これは、SJ-130の二次墓壙と窓の段に設けられたブロック擁壁の裏込めとの間、SJ-136の西方で検出された遺構で、炭化物を多量に含む覆土が一部遺存しているのみで遺構の形態、規模などは不明である、底面より弥生時代前期の小型甕などが出土している。

検出された各土壙の規模・深さ等の法量、及び出土遺物は下記一覧表にまとめた。

Tab. 2 出土土壤一覧表

遺構番号	平面形態	規模(上段…上面、下段…底面、単位:m・m ²)				柱穴状のビットなど	出土遺物	備考
		長さ・長径	幅・短径	深さ	底面積			
SK-135	—	— —	— —	— —	— —		弥生式土器 壺、鉢	
SK-137	不整円形	2.78 2.24	2.10 1.80	0.84	2.5		弥生式土器 壺、壺、器台 石鏡、石斧、叩き石	祭祀土壤
SK-138	不整円形	(2.4) (1.7)	1.86 1.68	0.75	2.0		弥生式土器 壺、壺	祭祀土壤
SK-139	不整円形	*2.22 *1.62	1.86 1.38	0.77	*2.2		弥生式土器 壺、壺 石劍	祭祀土壤
SK-140	不整形	3.08 2.72	1.94 1.12	0.38	2.6		弥生式土器 器台	祭祀土壤
SK-141	長方形	1.26 0.86	0.77 0.46	0.30	0.4			
SK-142	橢円形	1.80 1.60	(1.0) 0.82	0.23	1.0			
SK-143	隅丸長方形	2.00 1.86	1.53 1.38	0.22	2.5		縄文式土器 壺	
SK-144	隅丸長方形	1.24 1.06	0.84 0.64	0.26	0.6		弥生式土器 壺、壺	
SK-145	隅丸長方形	2.26 2.14	1.34 1.18	0.26	2.3		弥生式土器 壺	
SK-146	隅丸長方形	2.37 2.10	1.43 1.12	0.48	2.1			
SK-147	隅丸長方形	0.96 0.80	0.78 0.45	0.10	0.4	中央にピット状の埋込み		

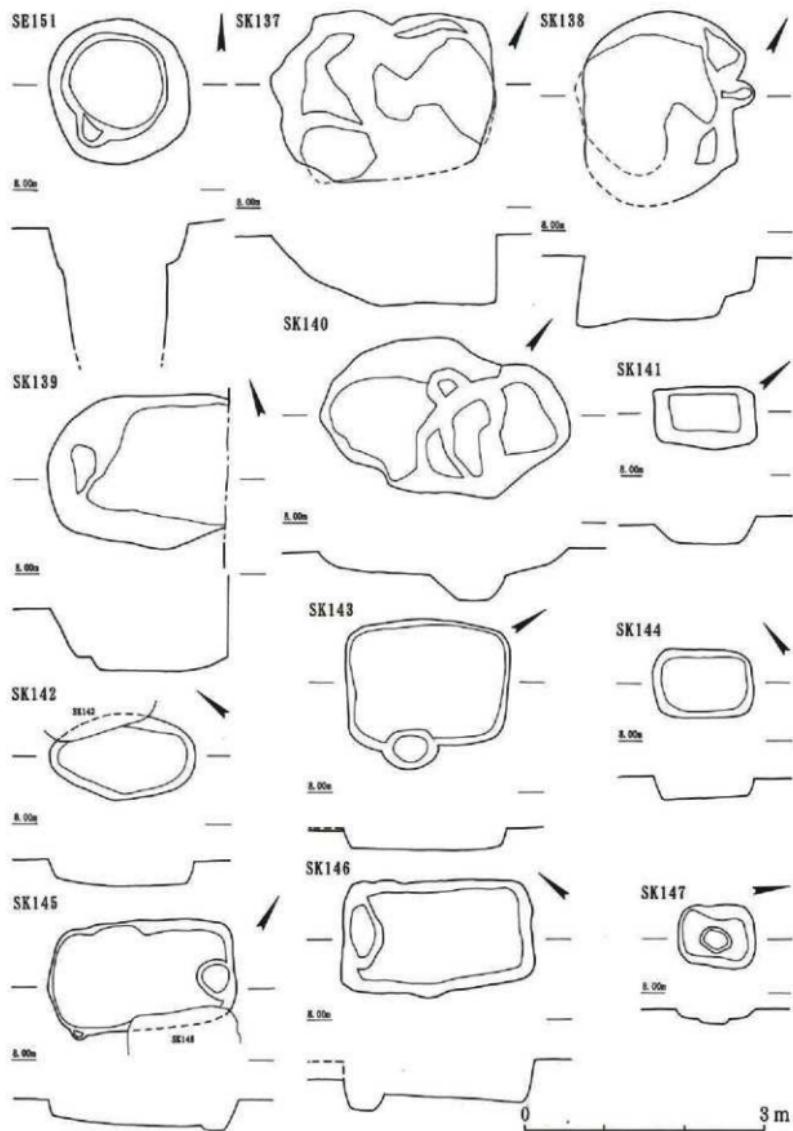


Fig.33 井戸跡・土壤実測図 SE-151・SK-137～SK-147 (1/60)

3. 溝跡 (Fig.34・PL. 6-6)

溝跡は、SD-148とSD-149の2条に遺構番号を冠して調査を行ったが、SD-149については比較的新しい時期の耕作に伴うものと判明した。ここでは、調査区の東辺A-2 Gr. から北西に延びB-2 Gr. でほぼ直角におれ東西に続くSD-148について報告したい。

SD-118は、中世の区画溝と考えられる溝跡で、調査区の東辺A-2 Gr. から北西に延びB-2 Gr. でほぼ直角におれ調査区南辺のC-3 Gr. へ向かって南西に続く。延長約30mが検出された。A-2 Gr. からB-2 Gr. の屈曲部付近までの約10mについては掘り下げたが、B-2 Gr. からC-3 Gr. 部分はその上面確認にとどめた。またこの溝跡は、調査区域の南の一段低い畠においても検出され丘陵南端付近まで続いていることが事前の確認調査時に確認されている。掘り下げた部分では、幅は上面で1.5m~2.0m、底面で0.5m~0.8mで断面は逆台形を呈す。深さは調査区東端で約0.7m、B-2 Gr. の屈曲部付近で約1.2mを計る。

出土遺物は、土鍋、羽釜、土師質皿、瓦質土器、擂鉢、中国製青磁碗片などが出土している。

SD148

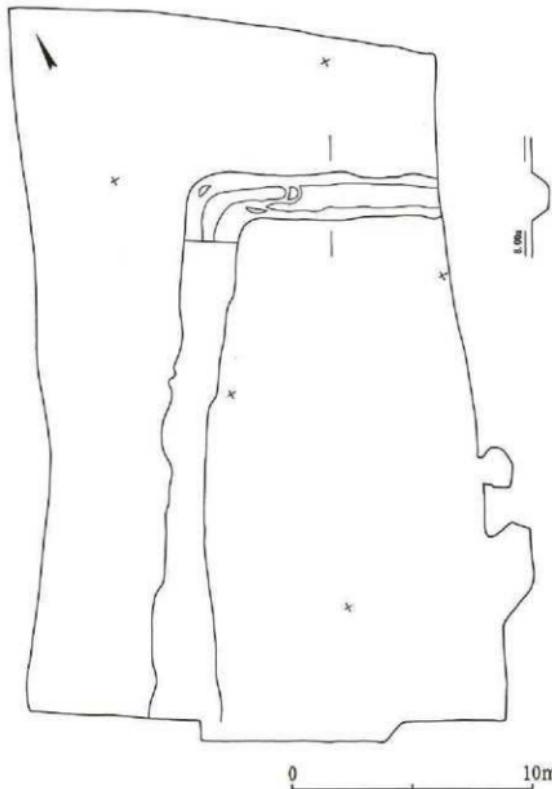


Fig.34 溝跡実測図 SD-148 (1/200)

V. 遺 物

今回の調査で出土した遺物は、壇棺墓の壇棺として用いられた弥生式土器、および各遺構から出土した各時代の土器や石器などがある。各遺構から出土した土器や石器は非常に少量であった。ここでは、壇棺墓として用いられた土器および各遺構から出土した遺物のうち特徴的なものについて報告したい。

1. 壇 棺 (Fig.35~38)

ここでは、壇棺墓の埋葬主体として用いられた土器について、出土した壇棺墓35基のうち、口縁部が遺存する29基の壇棺について口縁部を図示し、概要を報告したい。

今回の調査で出土した壇棺墓に使用された土器は、その形態により大型壇がA~C、大型鉢がA~C、小型壇がA、Bの各形態にそれぞれ分類できる。

大型壇A₁

器体は砲弾形を呈し、内側への張りだしが顕著なT字形口縁の壇で、胸部中位に2条の断面三角形の突帯が付くもの。SJ-104下、SJ-107上・下、SJ-110下、SJ-116下、SJ-119上・下、SJ-125下、SJ-126下、SJ-129下、SJ-130下壇。法量は、器高100cm~120cm、口径68cm~86cm。

大型壇A₂

器体は砲弾形を呈し、内側への張りだしが顕著なT字形口縁の壇で、口縁部下に断面複合山形突帯が、胸部中位に2条の断面三角形の突帯が付くもの。SJ-114下、SJ-310上壇。法量は、器高82cm~100cm、口径78cm~86cm。

大型壇B₁

器体は砲弾形を呈し、胸部がやや張りをもち、内外へ張りだした幅広のT字形口縁の壇で、口縁部平坦面が水平に近いもの。胸部中位に2条の断面三角形の突帯が付く。口縁部の平坦面が外へ下がったものB₂が認められる。SJ-101下、SJ-102下、SJ-124下、SJ-131下壇。法量は、器高110cm~123cm、口径66cm~86cm。

大型壇B₂

器体は砲弾形を呈し、胸部がやや張りをもち、内外へ張りだした幅広のT字形口縁の壇で、口縁部平坦面が外へ下がるもの。胸部中位に2条の断面三角形の突帯が付く。SJ-103下、SJ-112下、SJ-123下、SJ-131下壇。法量は、器高113cm~117cm、口径66cm~81cm。

大型壇C

器体は砲弾形を呈し、胸部がやや張りをもち、内外へ張りだした幅広のT字形口縁の壇で、口縁部平坦面は水平に近い。胸部中位に2条の断面コの字形の突帯が付く。SJ-117下壇。法量は、器高116cm、口径80cm。

大型壇D₁

鞍頭卵形の器体に、内側への張りだしが顕著なT字形口縁がつく壇で、胸部に2条の断面三角形の突帯が付く

もの。SJ-121下甕。法量は、器高75cm、口径35cm。

大型鉢D

截頭卵形の器体に、内外へ張りだした幅広のT字形口縁がつく甕で、胴部に2条の断面三角形の突帯が付くもの。口縁部下に断面三角形の突帯が付くもの（SJ-111下甕）と突帯が付かないもの（SJ-108下、SJ-113下甕）がある。法量は、器高66cm～67cm、口径36cm～44cm。

大型鉢A

体部が張りをもち、T字形口縁がつく鉢で、口縁部下に1条～2条の断面三角形の突帯が付くもの。SJ-102上、SJ-114上、SJ-129上甕。法量は、器高56cm、口径64cm～76cm。

大型鉢B

体部がやや張りをもち、内側への張出しが小さいT字形口縁がつく鉢で、口縁部下に0条～2条の断面三角形の突帯が付くもの。SJ-101上、SJ-103上、SJ-112上、SJ-116上、SJ-117上甕。法量は、口径63cm～71cm。

大型鉢C

体部は張りがなく笠状に開き、内側への張出しが小さく鈎形口縁に近いT字形口縁がつく鉢で、口縁部下に突帯がみえないもの。SJ-110上、SJ-123上、SJ-125上、SJ-126上甕。法量は、口径64cm～70cm。

小型甕A

器体は砲弾形を呈し、逆L字形口縁がつく甕で、口縁部下に突帯が0条～2条めぐるもの。SJ-105上・下、SJ-106上・下、SJ-108上、SJ-109上・下、SJ-118上、SJ-113上、SJ-121上、SJ-134上・下、SJ-134上・下甕。法量は、器高29cm～47cm、口径32～44cm。SJ-105下甕は中型甕で器高55cmを計る。

小型甕B

器体はいちじく形を呈し、逆L字形口縁がつく甕で、口縁部が外反しながら外へ開くもの。SJ-118上・下甕。法量は、器高34cm、口径29cm～34cm。

Tab. 3 出土墓棺一覧表

墓番号	上表 下表	器種	器高 (cm)	口径 (cm)	器体の形態	口縁部の断面形態	突 帯
SJ-101	上 大型鉢	※ 33	64	鉢 形	T字形	口縁部下に断面三角形の突帯 1条	
	下 大型壺	110	69	鉢 弹 形	T字形	肩部に断面三角形の突帯 2条	
SJ-102	上 大型鉢	※ 37	64	鉢 形	T字形	口縁部下に断面三角形の突帯 1条	
	下 大型壺	113	66	鉢 弹 形	T字形	肩部に断面三角形の突帯 2条	
SJ-103	上 大型鉢	※ 34	63	鉢 形	T字形	口縁部下に断面三角形の突帯 1条	
	下 大型壺	117	67	鉢 弹 形	T字形	肩部に断面三角形の突帯 2条	
SJ-104	上 大型鉢	※ 45	—	鉢 形	T字形		
	下 大型壺	100	68	鉢 弹 形	T字形	肩部に断面三角形の突帯 2条	
SJ-105	上 小型壺	※ 37	42	鉢 弹 形	逆L字形	口縁部下に断面三角形の突帯 1条	
	中型壺	55	43	鉢 弹 形	逆L字形	口縁部下に断面複合山形突帯 1条	
SJ-106	上 小型壺	34	32	鉢 形	逆L字形		
	下 小型壺	37	36	鉢 弹 形	逆L字形		
SJ-107	上 大型壺	※ 105	69	鉢 弹 形	T字形	肩部に断面三角形の突帯 2条	
	下 大型壺	102	70	鉢 弹 形	T字形	肩部に断面三角形の突帯 2条	
SJ-108	上 小型壺	※ 3	32	鉢 弹 形	逆L字形		
	下 大型壺	66	36	戴頭卵 形	T字形	肩部に断面三角形の突帯 2条	
SJ-109	上 小型壺	45	43	鉢 弹 形	逆L字形	口縁部下に断面三角形の突帯 2条	
	下 小型壺	47	40	鉢 弹 形	逆L字形	口縁部下に断面三角形の突帯 2条	
SJ-110	上 大型鉢	※ 6	70	笠 形	T字形	肩部に断面三角形の突帯 2条	
	下 大型壺	120	73	鉢 弹 形	T字形	肩部に断面三角形の突帯 2条	
SJ-111	上 小型壺	36	32	鉢 弹 形	逆L字形		
	下 大型壺	72	42	戴頭卵 形	T字形	口縁部下に断面三角形の突帯 1条	
SJ-112	上 大型鉢	※ 32	68	鉢 形	T字形	肩部に断面三角形の突帯 2条	
	下 大型壺	123	78	鉢 弹 形	T字形	肩部に断面三角形の突帯 1条	
SJ-113	上 小型壺	※ 99	43	鉢 弹 形	逆L字形	口縁部下に断面三角形の突帯 1条	
	下 大型壺	67	42	戴頭卵 形	T字形	肩部に断面三角形の突帯 2条	
SJ-114	上 大型鉢	56	76	鉢 形	T字形	口縁部下に断面三角形の突帯 2条	
	下 大型壺	109	78	鉢 弹 形	T字形 口縁部下に断面複合山形突帯 1条、肩部に断面三角形の突帯 2条		
SJ-115	上 —	20	—	鉢 弹 形 ?	—	—	
SJ-116	上 大型鉢	※ 14	68	鉢 形	T字形	口縁部下に断面三角形の突帯 1条	
	下 大型壺	※ 109	78	鉢 弹 形	T字形	肩部に断面三角形の突帯 2条	
SJ-117	上 大型鉢	※ 39	71	鉢 形	T字形	—	
	下 大型壺	116	80	鉢 弹 形	T字形	肩部に断面三角形の突帯 2条	
SJ-118	上 小型壺	※ 15	34	鉢 弹 形	逆L字形	—	
	下 小型壺	34	29	鉢 弹 形	逆L字形	—	
SJ-119	上 大型壺	※ 51	80	鉢 弹 形	T字形	—	
	下 大型壺	122	82	鉢 弹 形	T字形	肩部に断面三角形の突帯 2条	
SJ-120	上 —	—	—	—	—	—	
	下 小型壺	—	—	—	—	部下に断面複合山形突帯 1条	
SJ-121	上 小型壺	※ 21	29	鉢 弹 形	逆L字形	肩部に断面三角形の突帯 2条	
	下 大型壺	75	35	戴頭卵 形	T字形	—	
SJ-122	上 —	—	—	—	—	—	
	下 大型壺	※ 65	—	戴頭卵 形 ?	—	肩部に断面三角形の突帯 2条	
SJ-123	上 大型鉢	※ 31	65	笠 形	T字形	—	
	下 大型壺	113	81	鉢 弹 形	T字形	肩部に断面三角形の突帯 2条	
SJ-124	下 大型壺	123	86	鉢 弹 形	T字形	肩部に断面三角形の突帯 2条	
SJ-125	上 大型鉢	※ 26	70	笠 形	T字形	—	
	下 大型壺	119	78	鉢 弹 形	T字形	肩部に断面三角形の突帯 2条	
SJ-126	上 大型鉢	※ 18	64	笠 形	T字形	—	
	下 大型壺	113	67	鉢 弹 形	T字形	肩部に断面三角形の突帯 2条	
SJ-127	下 大型壺	※ 100	—	鉢 弹 形	—	肩部に断面三角形の突帯 2条	
SJ-128	上 —	—	—	—	—	—	
	下 大型壺	※ 41	—	戴頭卵 形 ?	—	肩部に断面三角形の突帯 2条	
SJ-129	上 大型鉢	※ 22	70	鉢 形	T字形	口縁部下に断面三角形の突帯 1条	
	下 大型壺	113	74	鉢 弹 形	T字形	肩部に断面三角形の突帯 2条	
SJ-130	上 大型壺	101	82	鉢 弹 形	T字形 口縁部下に断面複合山形突帯 1条、肩部に断面三角形の突帯 2条		
	下 大型壺	100	86	鉢 弹 形	T字形	肩部に断面三角形の突帯 2条	
SJ-131	下 大型壺	114	71	鉢 弹 形	T字形	肩部に断面三角形の突帯 2条	
SJ-132	上 —	—	—	—	—	—	
	下 小型壺	※ 34	—	鉢 弹 形 ?	—	—	
SJ-133	下 大型壺	※ 52	—	鉢 弹 形 ?	—	—	
SJ-134	上 小型壺	9	33	鉢 弹 形	逆L字形	—	
	下 小型壺	※ 16	33	鉢 弹 形	逆L字形	—	
SJ-135	上 小型壺	※ 15	33	鉢 弹 形	逆L字形	—	
	下 小型壺	38	33	鉢 弹 形	逆L字形	—	

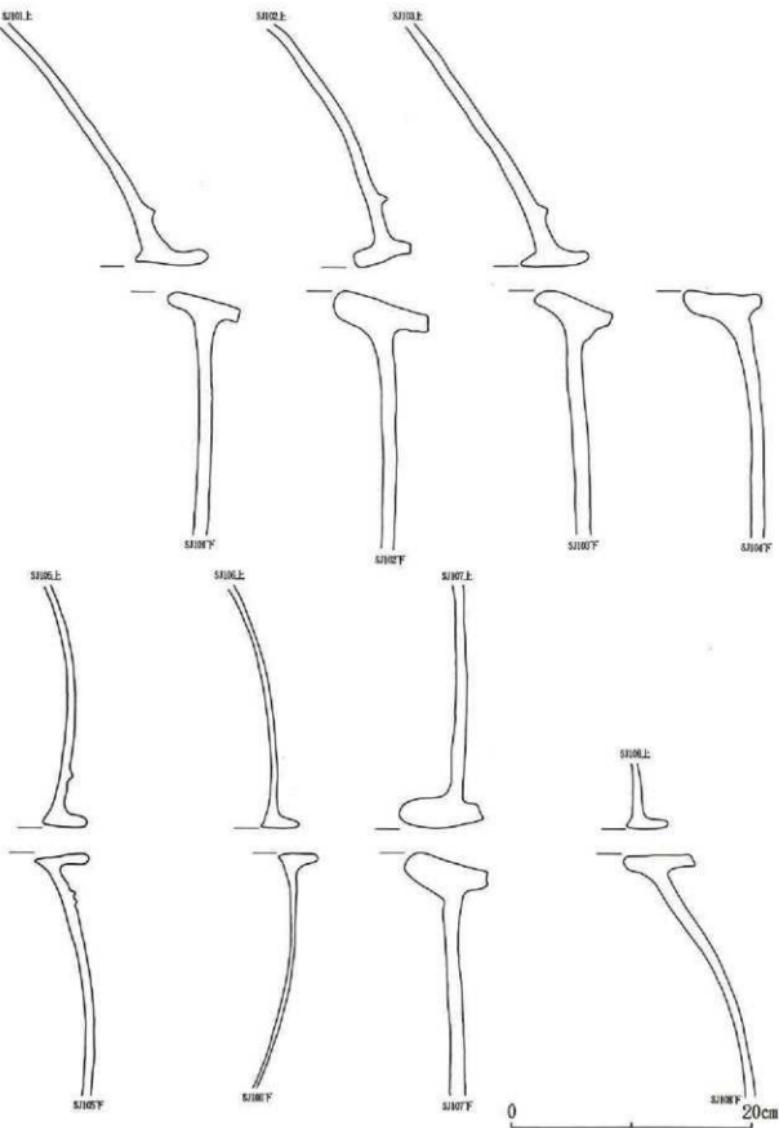


Fig.35 變種口緣実測図(1) SJ-101~SJ-108 (1/4)

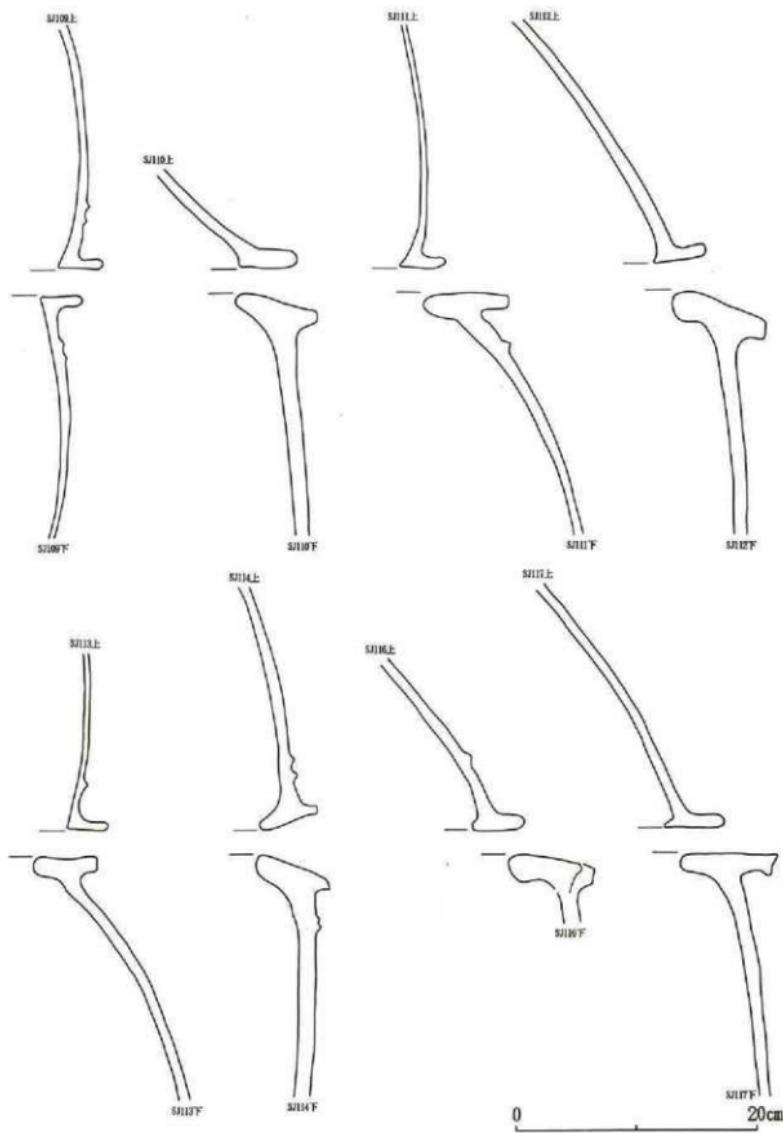


Fig.36 葬棺口縁測図(2) SJ-109~SJ-114・SJ-116・SJ-117 (1/4)

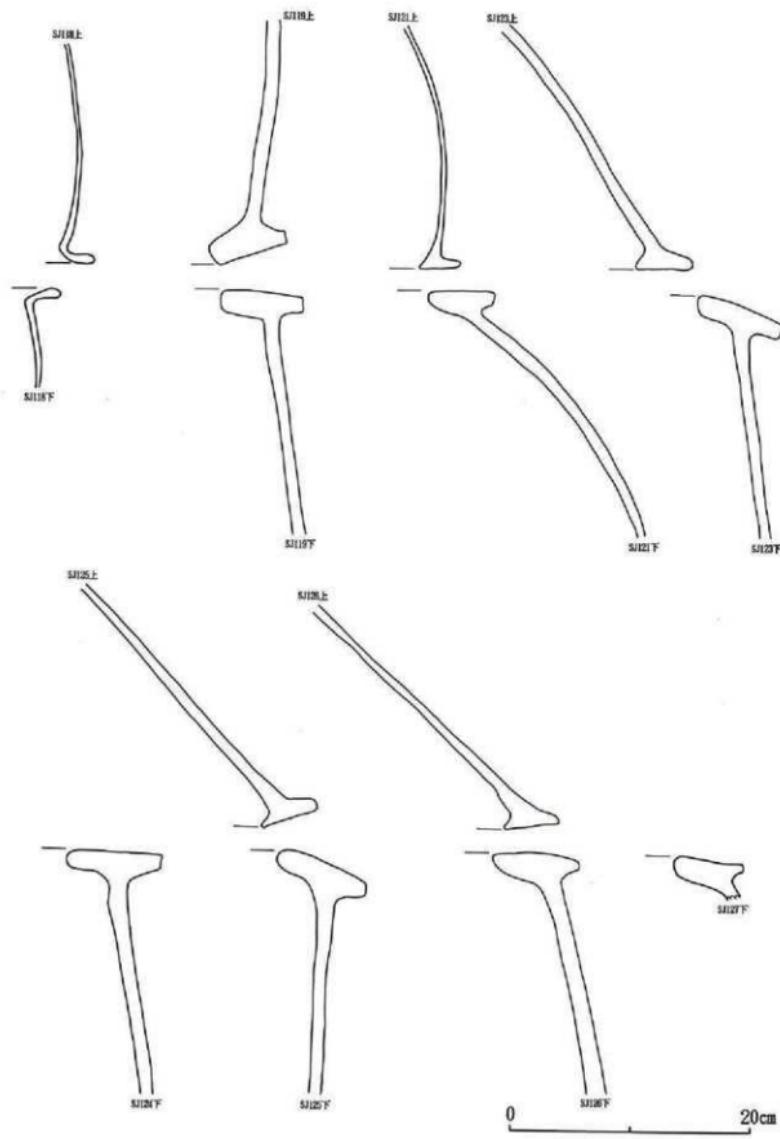


Fig.37 長椎口縁実測図(3) SJ-118・SJ-119・SJ-121・SJ-123～SJ-127 (1/4)

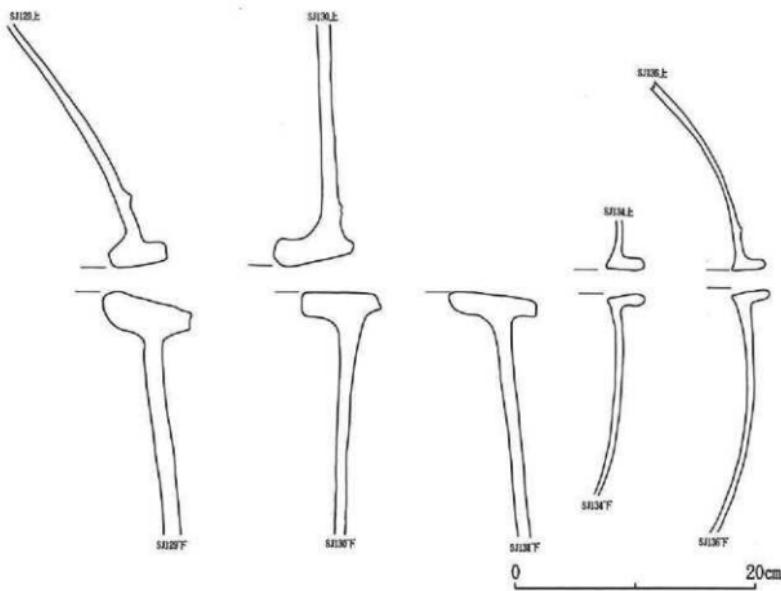


Fig.38 棘椎口縁夾測図(4) SJ-129~SJ-131・SJ-134・SJ-136 (1/4)

2. その他の土器・石器 (Fig.39~42・PL. 7 ~10)

今回の調査で甕棺墓以外の遺構から出土した土器・石器などの遺物の出土量はそう多くはない。土器は、小片が出土しているが、その多くは図示しえなかった。ここでは、代表的なものについて土器類は遺構ごとに、石器類については器種ごとに報告したい。なお、実測図中の遺物番号と写真図版の遺物番号は一致する。また、石器については、文中の遺物番号と写真図版の遺物番号は一致する。

土器類 (Fig.39~42・PL. 7 ~10)

SK-135出土土器 (Fig.39・PL. 7 - 1)

- 1は球形の体部に短い頸部がつき口縁がやや外反しながら聞く壺で、粗い胎土で、外面はナデ。同一個体と思われる円盤形の底部が出土しているが直接接合はできなかった。
- 2もやや上げ底気味の壺の底部で胎土は粗く、外面ナデ。
- 3は半球形の体部をもつと思われる鉢で、口縁外面に断面三角形の突帯をめぐらし、小さい逆L字形口縁を造っている。胎土は粗く、器面が荒れているため調整不明。

SK-137出土土器 (Fig.39・PL. 7 - 2、3、8 - 2)

- 4～6は筒形器台で、4が受部、5が透かしの間の脚部、6が据部である。いずれも細かな胎土で、同一個体と思われるが直接接合はできなかった。
- 7～10は逆L字形口縁の口縁部をもつ壺で、7は口縁部が内側にやや張り出したもの。9は口縁部下に断面三角形の突帯がめぐる。
- 11はやや上げ底気味の壺の底部で胎土は細かく外面ナデ、外面には赤色塗彩の痕跡が認められる。

SK-138出土土器 (Fig.39)

- 12は壺の底部で胎土は細かく外面ナデ、外面は底面を除き赤色塗彩されている。

SK-139出土土器 (Fig.39、40・PL. 7 - 4 ~ 7)

- 13～17、21は壺。13、14は底部で胎土は細かく、内外面ともにナデ、外面には赤色塗彩されている。16も底部で胎土はやや粗い、底面にヘラ状の工具の先端で不規則に引っかいたような数条の溝状の窪みをもつ。17は壺の体部で胎土は細かく、内外面ともにナデ。21は胸部中位や上方に最大径をもち、頸部が外反しながら大きく聞く、断面鶴形口縁の壺で、脚部に断面三角形の突帯がめぐる。内外面共にナデ。器高43.3cm、口径31.4cmを計る。
- 19、20、22は甕。19は逆L字形平坦口縁の壺で口唇部には細かく浅い刻み目が施され、口縁部下断面複合山形の突帯がめぐっている。胎土は細かく、器面が荒れているものの外面には赤色塗彩の痕跡が認められる。20、22は逆L字形口縁の甕で胎土はやや粗い。
- 23～24 (Fig.40・PL. 7 - 8、8 - 1、2)は、SK-137、SK-138、SK-139の上部より表剥ぎや遺構検出時に採取されたもので、ここでまとめて報告する。23は、高坏または器台の脚部と考えられる破片で、胎土は細かく、外面には刷毛目を残し、赤色塗彩されている。内面は脚部を絞ったために器壁がたわんでいる。24は逆L字形平坦口縁の甕で口唇部には細かく浅い刻み目が施され、胎土は細かく、外面は赤色塗彩されている。

SK-140出土土器 (Fig.40・PL. 8 - 3)

25は断面動形口縁の壺。26は筒形器台の受部。

SK-143出土土器 (Fig.40・PL. 8 - 4)

27は繩文時代晩期の壺で内傾しながら立ち上がる口縁を外に開き口唇部に鈍い刻み目を施している。

SK-144出土土器 (Fig.40, 41・PL. 8 - 4, 5)

28、30、31は逆L字形口縁の壺。28、31は口縁部下に断面三角形の突帯をもつ。

29は壺の底部で胎土は粗く内外面共に器面が荒れている。

SK-145出土土器 (Fig.41・PL. 8 - 6)

32は半球形体部をもつと思われる鉢の口縁で口縁外面に刻み目突帯がめぐる。

33は口縁部外面に断面三角形の突帯がつく壺。34は逆L字形口縁の壺。

SD-148出土土器 (Fig.41・PL. 8 - 7, 8, 9 - 6)

35は羽釜、内面に横位の刷毛目を残す。底部外面に煤の付着はみられず、あまり使用されていないものと考えられる。

36、37は土鍋。36は陶質、37は素焼。

38、39、40は舶載青磁。38は皿で高台内蛇の目？釉剥ぎ。39、40は碗で高台内無釉。

41は瓦質の鉢で口縁外面に横位の蔭線で区画した文様帯を設けそのなかに四重角棒の押圧文が連続施文されている。

42は素焼の擂鉢で、外面はナデられているが粗い刷毛目を残す、内面は斜めの刷毛目を施した上に一単位3条からなる擂り目が施されている。

SD-149出土土器 (Fig.41・PL. 9 - 1)

SD-149は、新しい時期の溝跡と判明した遺構であるが、43、44などの弥生式土器も出土している。

SE-151出土土器 (Fig.41, 42・PL. 9 - 2～5)

45は滑石製の石鍋、内面には製作痕を残し、外面は丁寧に磨かれている。また外面は直接火を受けたものであろう黒色を呈している。

46、47は口縁が玉縁状を呈す陶質の土鍋。

48は須恵質の壺で肩部外面に格子目状の叩き目を残す。

49は土師質の皿。

50～52は舶載磁器。50は白磁の皿、51、52は青磁碗で高台内は無釉。53は素焼の高台つき碗。

斐棺内出土土器 (Fig.42・PL. 9 - 6, 7, 10 - 1～3)

以上、各遺構出土遺物のほかに斐棺墓の棺内からも土器類が出土している。これはおそらく棺体が潰れたとき

に周囲にあった複数墓や土壙などの遺物が棺内に落ち込んだものと推測される。

54～57は砲弾形を呈す、逆L字形口縁の甕で、小児棺として埋葬されたものであろう。54はSJ-104棺内、55～57はSJ-107棺内から出土。

58は土師質の皿でSJ-124棺内出土。59～61は舶載青磁碗片、SJ-127棺内出土。このほかにSJ-130の棺内からは砲弾形の小型甕の底部破片が出土している。

石器類 (PL.13-4、5)

今回の調査では石劍、石鎌、石錐、石斧、叩き石のほか、土弾も出土している。

1は石劍。身の部分のみが遺存している。長さ4.3cm、幅3.5cm、断面は偏平な菱形を呈し厚さは0.9cm。砂岩質。重量は遺存部で19.5g。SK-137、SK-138、SK-139の上面で採取。

2～6は石鎌。2は砂岩製の平基式の磨製石鎌で先端部を欠く。長さ4.5cm、幅1.8cm、厚さ0.3cm、重量3.3g。SJ-124の墓壙より出土。3は黒曜石製の水滴形の石鎌。長さ2.8cm、幅1.9cm、厚さ0.6cm、重量2.7g。SK-137出土。4～6はサヌカイト製の四基式の石鎌。4は長さ3.2cm、幅2.1cm、厚さ0.3cm、重量1.9g。SK-137出土。5は長さ2.8cm、幅2.3cm、厚さ0.7cm、重量3.4g。SJ-108の墓壙より出土。6は長さ1.9cm、幅1.5cm、厚さ0.2cm、重量0.6g。表探資料。

7はサヌカイト製の石錐。長さ2.3cm、幅1.6cm、厚さ0.5cm、重量1.4g。表探資料。

8は土弾。ラグビーボールを細長くしたような形態で、断面はほぼ円形を呈す。長さ4.4cm、径2.3cm、重量17.6g。SJ-104の墓壙より出土。

9は蛇紋岩製の磨製石斧。長さ8.0cm、幅5.6cm、厚さ2.1cm、重量143.5g。SK-138出土。

10は凝灰岩製の叩き石。長軸5.5cm、短軸4.5cmのやや偏平な円形を呈し、厚さ3.2cm、重量96.1g。SK-138出土。

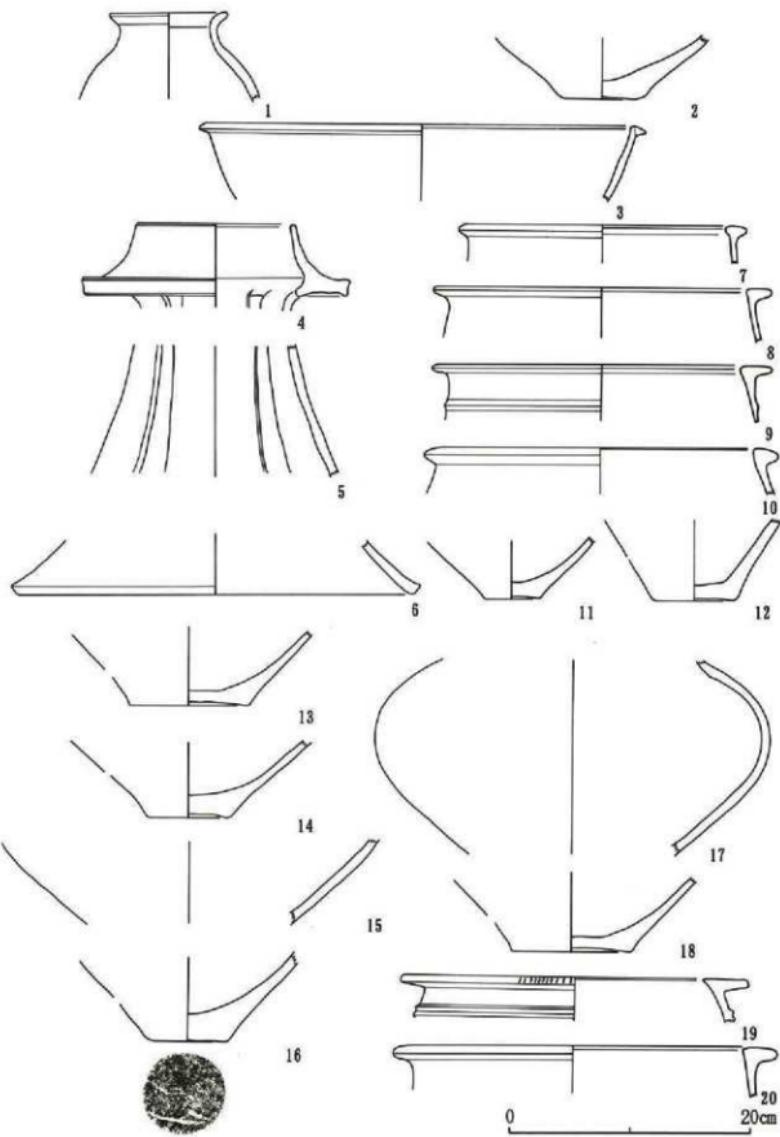


Fig.39 出土土器実測図(1) SK-135・SK-137～SK-139 (1/4)

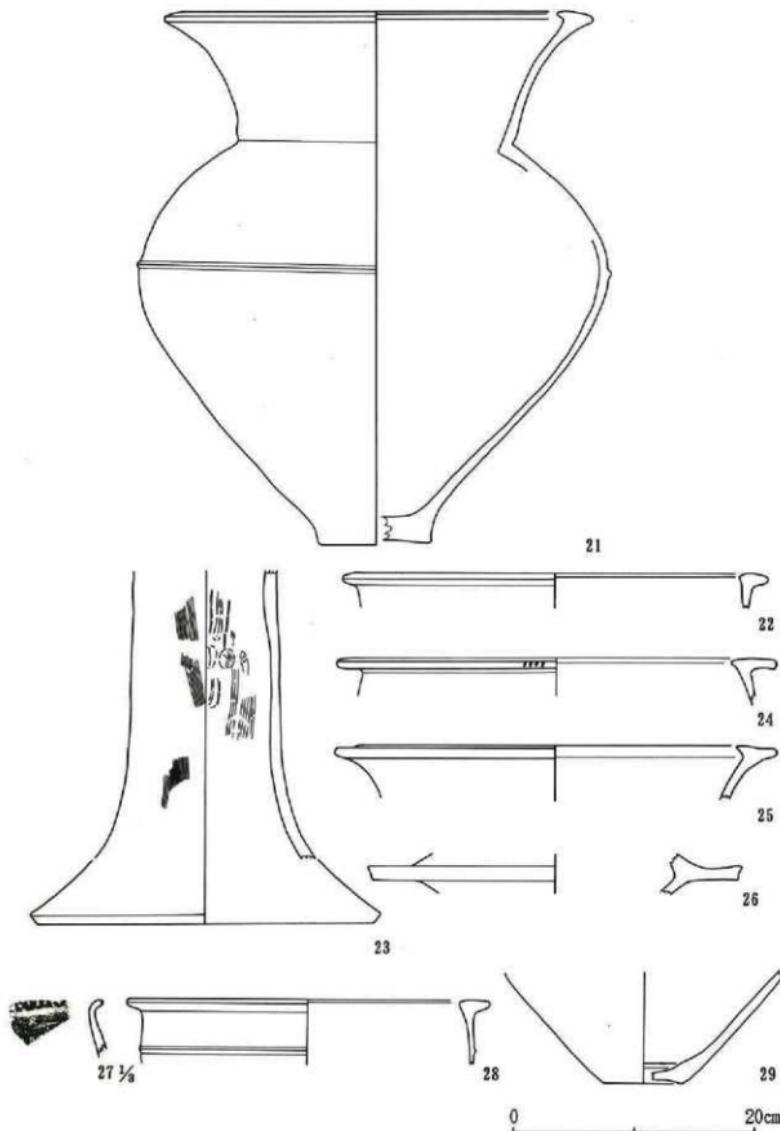


Fig.40 出土土器実測図(2) SK-137～SK-140・SK-143・SK-144 (1/4)

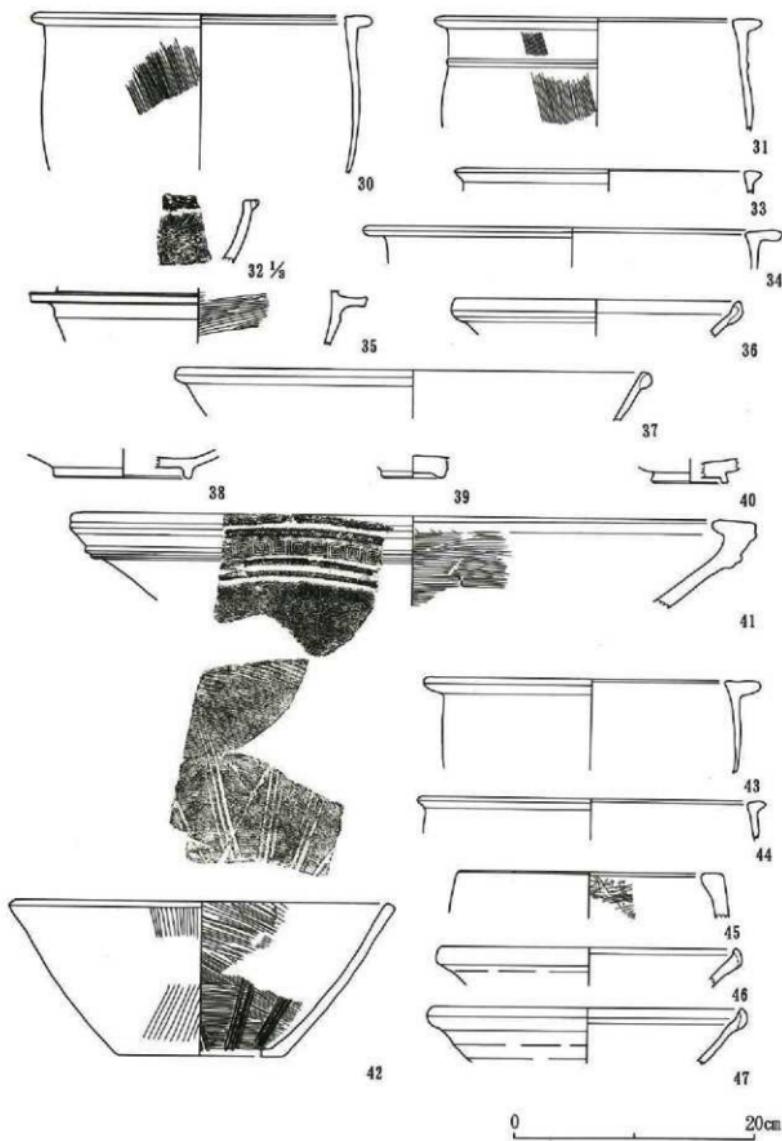


Fig.41 出土土器実測図(3) SK-144・SK-145・SK-148・SK-149・SE-151 (1/4)

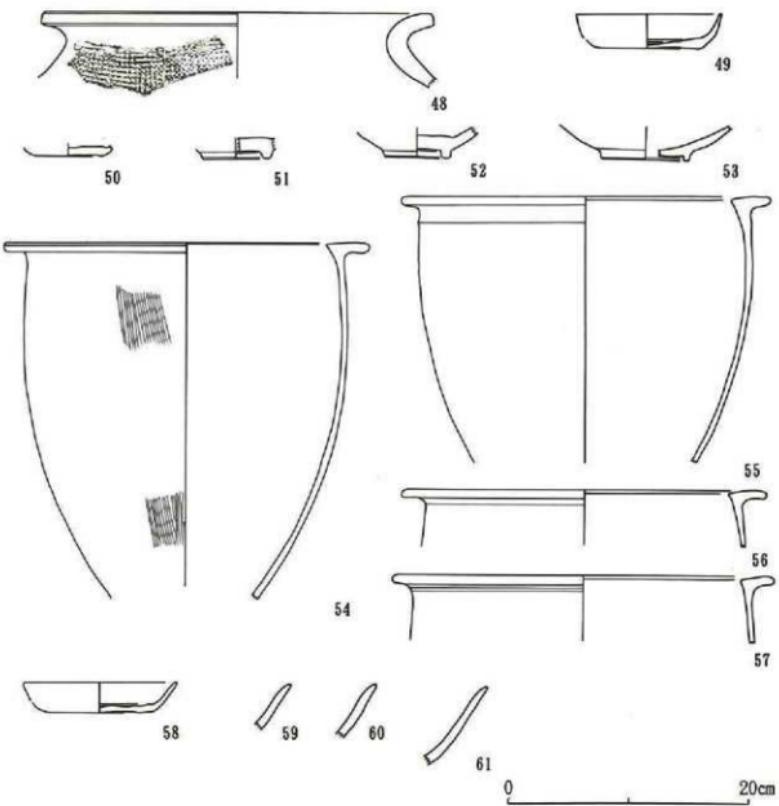


Fig.42 出土土器実測図(4) SE-151・SJ-104・SJ-107・SJ-124・SJ-127 (1/4)

VII. まとめ

今回の調査では、後世の耕作などでかなり遺跡の原状が損なわれていたにもかかわらず、弥生時代中期の壺棺墓35基、土壙12基、中世の井戸跡1基、溝跡1条、他ピットなどが検出された。

坊所丘陵上の遺跡については、近年の再開発に伴い徐々に調査例が増加しつつあるが、まだ部分的な調査にとどまっている。よって、遺跡の全体像については今後の調査を待って検討することとした。

ここでは、今回の調査の成果、とくに壺棺墓について調査所見を簡単に述べ、まとめとしたい。

壺棺墓遺跡集団について

今回の調査で出土した35基の壺棺墓は、下坊所丘陵の先端部に営まれているが、これらを残した集団の集落は小谷を隔てた上坊所丘陵上に求めることが妥当であろう。近年の上峰町ふるさと学館建設や共同住宅建設に伴い実施した桜寺遺跡の調査（それぞれ平成4年、平成8年、上峰町教育委員会調査、いずれも整理中。）では、弥生時代から中世にかけての遺跡が確認されており、この弥生集団によって営まれたものと考えられる。

壺棺墓の分布について

今回出土した壺棺墓の分布をみると、本項でも触れたが、いくつかのグループにまとまっている。今回の調査区域内という限られた範囲内においても、スペース的に余裕があるにもかかわらず、SJ-107、SJ-114、SJ-130などを中心に数基の壺棺墓が、集中して営まれている。そして、各々の群を構成する個々の壺棺の形態をみると、それぞれの群が順次時間差をもって営まれたのではなく、同時に各地点ごとに並行して営まれている。また、出土した各壺棺の主軸をみると、各群を構成する主要な壺棺は、ほとんどがN-50°-W、N-130°-E、またはこれと直交するN-140°-W、N-40°-E前後の軸を主軸としている。

このようなことから、ここに墓域を営むにあたっては、各地点ごとに埋葬が行われているものの、墓域全体的には主軸による規制が働いているといえる。この全体的な規制を「集団」に置き換えると、今回の調査で確認された一つ一つの壺棺墓群は、一つの群に前後して埋葬された被葬者の間の有機的な関係が反映されたものではないだろうか。それが血縁的なものか、あるいは集団のなかの役割的なものは今後の課題としたい。

壺棺として使用された土器について

また、個々の壺棺の形態についてみると、大型壺は砲弾形のA類～C類、截頭卵形のD類の4形態に、大型鉢はA～Cの3形態に、小型壺はA類、B類の2形態に分類した。そして、それぞれの棺体は、下記の順で形態が変化するものと考えられる。その時期については、いずれも弥生時代中期におさまるものである。

今回の調査で検出された壺棺について上下の棺の組合せなどを整理すると以下のとおりである。

成人用	大型壺（砲弾形）	A ₁ ・A ₂ → B ₁ → B ₂ → C
	大型鉢	A → B・C →
小児用	大型壺（截頭卵形）	D ₁ → D ₂ →
	小型壺	A → B

祭祀土壙について

今回の調査では壺棺墓とともに祭祀の用に供したと考えられる土壙が4基(SK-137～SK-140)検出された。壺棺墓域の北東部に集中して営まれている。いずれも不整円形の掘り込みで、掘り方も不規則な土壙である。赤色塗彩された壺、甕、筒形器台などが出土しているところから、祭祀土壙と判断した。

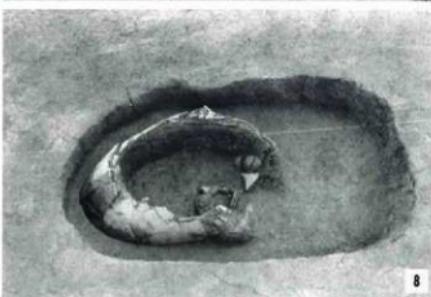
SK-137、SK-138、SK-139は、場所を少しずつ移しながら、祭祀の度に連続して営まれたものようである。また調査中は一基の土壙として取り扱ったが、SK-140も結果的にみると二度にわたって掘られた可能性も多い。また各祭祀土壙から出土した遺物をみても、壺棺墓と同時期に営まれたといえる。

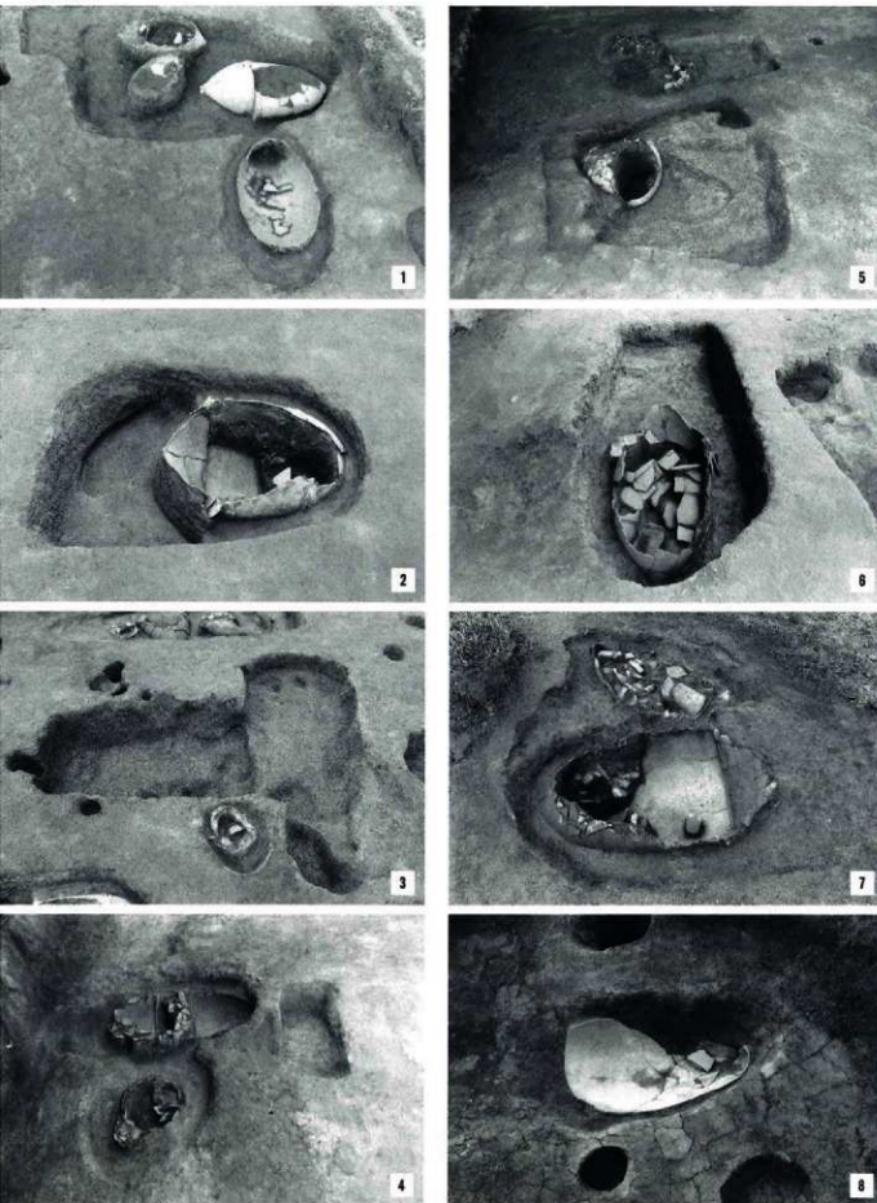
以上、今回の調査によって検出された壺棺墓についての簡単に所見を列記した。

これまで比較的まとまった埋蔵文化財の調査例が少なく、その実態が不鮮明なままであった坊所地区において、今回、一部ではあるが弥生時代中期の墓域の調査によって、上峰町南部における当時の社会の動向を考える上で貴重な資料を得ることができたといえる。しかしながら、前述したように坊所丘陵上の遺跡の調査は、未だ部分的なものである。今回の調査で検出された弥生時代遺跡をはじめ、この坊所地区の遺跡の全体像の解明については今後の調査に期待したい。

なお、今回の調査にあたって、その趣旨をご理解いただき、ご協力くださった地権者 福島 ヨシ子 様には、確認調査の実施から今日まで、多大なるご迷惑をおかけしました。文末にてはなはだ失礼ですが、この場でお詫びを申し上げます。

図 版





1 SJ-113～SJ-116 一南より一

2 SJ 117 一北東より一

3 SJ-118・SK-145・SK-146 一北東より一

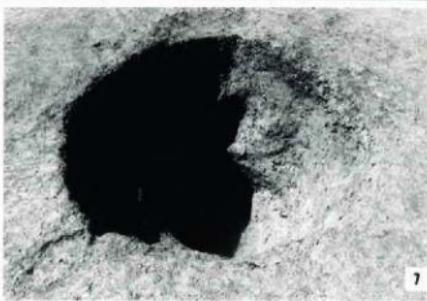
4 SJ-119～SJ-121・SK-141 一南西より一

5 SJ-122～SJ-124 一南東より一

6 SJ-123 一南西より一

7 SJ-125・SJ-126 一西より一

8 SJ-127 一東より一



1 SJ-128～SJ-130 一南西より一

4 SJ-133 一南より一

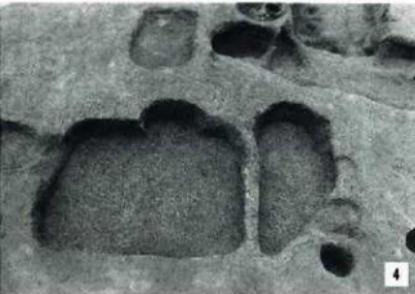
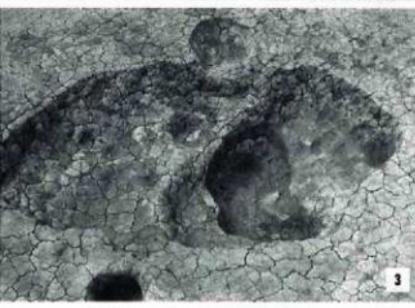
2 SJ-128～SJ-130 一北西より一

5 SJ-133 一北西より一

3 SJ-131・SJ-132 一南西より一

6 SJ-136 一東より一

7 SE-151 一東より一



1 SK-137～SK-140 一東より一

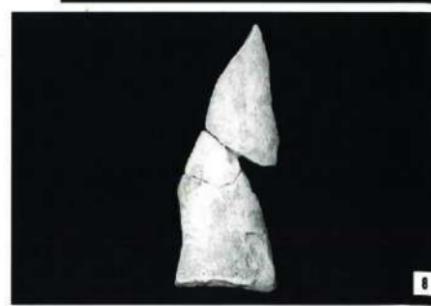
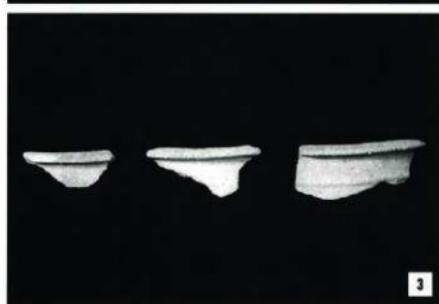
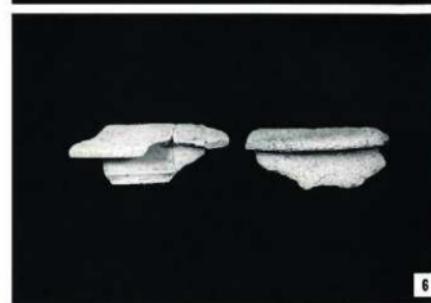
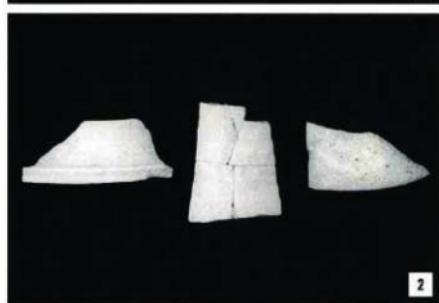
2 SK-137～SK-139 一南より一

3 SK-140 一南より一

4 SK-142～SK-143・SK-144 一北西より一

5 SK-147—東より一

6 SD-148—南東より一



1 1、2 SK-135

5 17 SK-139

2 4~6 SK-137

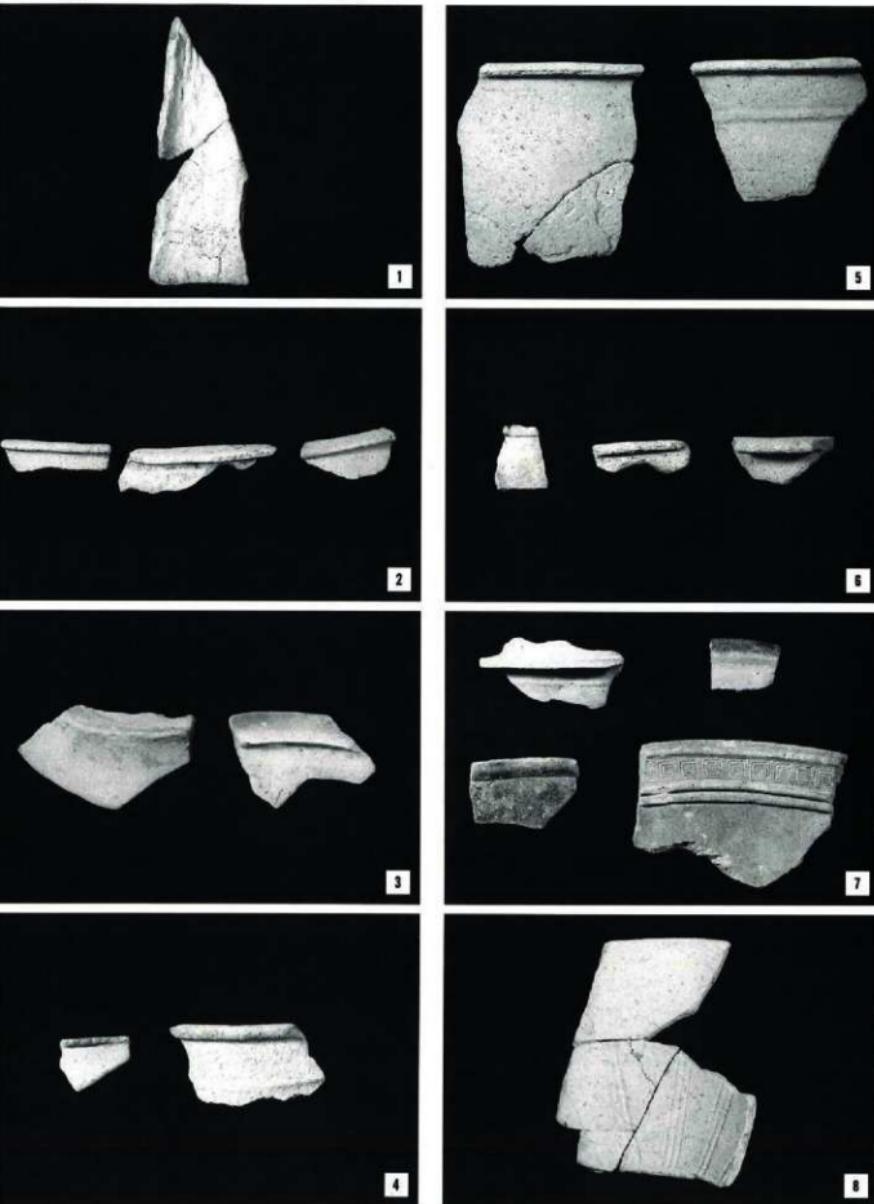
6 19、20 SK-139

3 7~9 SK-137

7 21 SK-139

4 16 SK-139

8 23 SK-137~SK-139



1 23 SK-137~SK-139

2 22, 24, 10 SK-137~SK-139

3 26, 25 SK-140

4 27 SK-143, 28 SK-144

5 30, 31 SK-144

6 32~34 SK-145

7 上) 35, 36、下) 37, 41 SD-148

8 42 SD-148



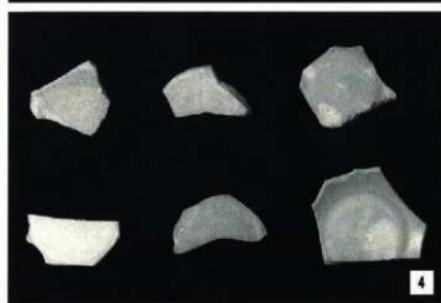
1



2



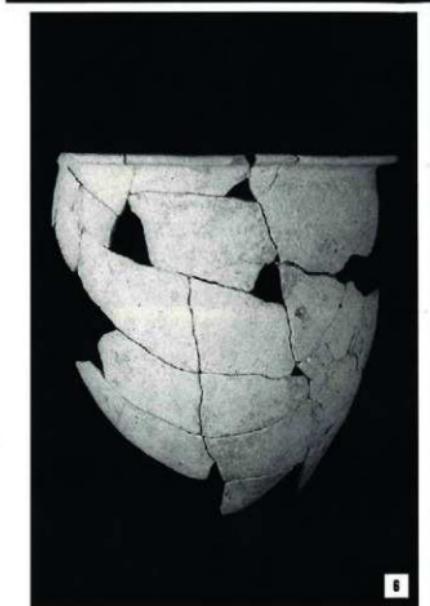
3



4



5



6



7

1 43、44 SD-149

2 上) 45~47、下) 46、53 SE-151

3 49 SE-151

4 上) 38~39、SD-148、下) 50~52 SE-151

5 上) 38~39、SD-148、下) 50~52 SE-151

6 54 SJ-104

7 53 SJ-107



1



2



3

1 58 SJ-124

2 59~61, SJ-127

3 59~61, SJ-127



4



5

4 上) 1 石劍、2~4 石鏹

下) 5、6 石鏹、7 石錐、8 土彈

5 9 石斧、10 叩き石

報告書抄録

ふりがな	ぼうじょにほんまついせき							
書名	坊所二本松遺跡							
副書名	共同住宅建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	上峰町文化財調査報告書							
シリーズ番号	第15集							
編著者名	原田 大介							
編集機関	上峰町教育委員会							
所在地	佐賀県三養基郡上峰町大字坊所319-4 上峰町民センター TEL 0952-52-3833							
発行年月日	1998年3月31日							
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コ一ド		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
坊所二本松	佐賀県三養基郡 上峰町 大字坊所 学二本松	市町村	遺跡番号	°' "	°' "			
		41345	2021	33°18'44"	130°25'33"	1997.6.9 1997.9.13	600m ²	共同住宅 建設工事
			3032					
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
坊所二本松	墳墓跡	弥生時代 中世	甕棺墓 土壙 井戸跡 溝跡	35基 12基 1基 1条	弥生式土器(中期) 甕棺 石器類 中世土器類 舶載磁器			

上峰町文化財調査報告書第15集

坊所二本松遺跡

平成10年3月24日印刷

平成10年3月31日発行

編集行
発行

上峰町教育委員会

佐賀県三養基郡上峰町坊所319-4

印刷

(株)昭和堂印刷 佐賀支店

佐賀県佐賀市高木瀬西4丁目12-1

